



大通世畧

全

^ 13
2053



門 13
辨 2053
卷

幸堂得知標註

大連豐齋

十已何堂公孫

大進 喜界の序



七

八

九

十

十一

大進 喜界の序

響庭 管村

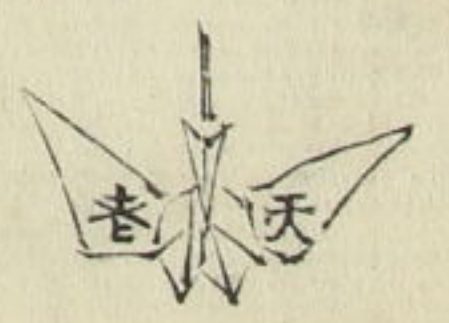


明店の前より五つ藝女の坊。枝裏乃角小進ふ人。日車夫。つづ
り美し。恨みありんや。落葉の書生。非蔵の宿吏。これより憤
り美し。画工と審者をとりて眼をくちけり。作家もあつて批
評家を識りて朝暮。商人も昔と不景を嘆き。藝妓の
家も昔常と罵る。六合の巾着の空気を以て充てん。四海
乃人泣言書一の白痴をなす。此時よりあつて一臍ふ
温氣を保て見。腦小緩和を付きんとの滑稽小説の外に
存んや。左も右も其の南時。滑稽をなすもの。喜つて可笑
く笑ふよあ。果は涙が出ぬよ。底を振って
云も一向開きぬ。木平のらうり。底を振って
見ても。此奴野禽の骨頂。淫言の聞山。と茶屋よ毛の生

をかゝる標題をも久通書家と名づけてこれ標本と
 銘を
 金と書す

春陽まろく、主人少代りて

半一宮得志述



卷中目録

金々先生榮花のゆゑん
 春所作
 三和作
 京傳作
 名物毒ぐんぐんぬ



喜

金々先生榮花夢

良

怒

春所作

三和作

京傳作

名物毒ぐんぐんぬ

春陽まろく、主人少代りて

半一宮得志述

銘を

金と書す

をかゝる標題をも久通書家と名づけてこれ標本と

文曰く浮世の夢の如く、秋の夕陽をまじりて、
 雨り金々先生は、一生の榮花も、邯鄲の枕の夢も、もは、粟粒一とし、
 乃か、金々先生は、何人とも、つら、つら、つら、つら、つら、つら、つら、つら、
 けか、金々先生は、若し、金々先生は、若し、金々先生は、若し、金々先生は、
 とも、つら、つら、つら、つら、つら、つら、つら、つら、つら、つら、つら、つら、
 神楽論、おぼろ、おぼろ、おぼろ、おぼろ、おぼろ、おぼろ、おぼろ、おぼろ、
 小づつと、まは、まは、まは、まは、まは、まは、まは、まは、まは、まは、
 春所作

久通書家

久通書家

高川を可... 深みは後... 今昔片田舎...

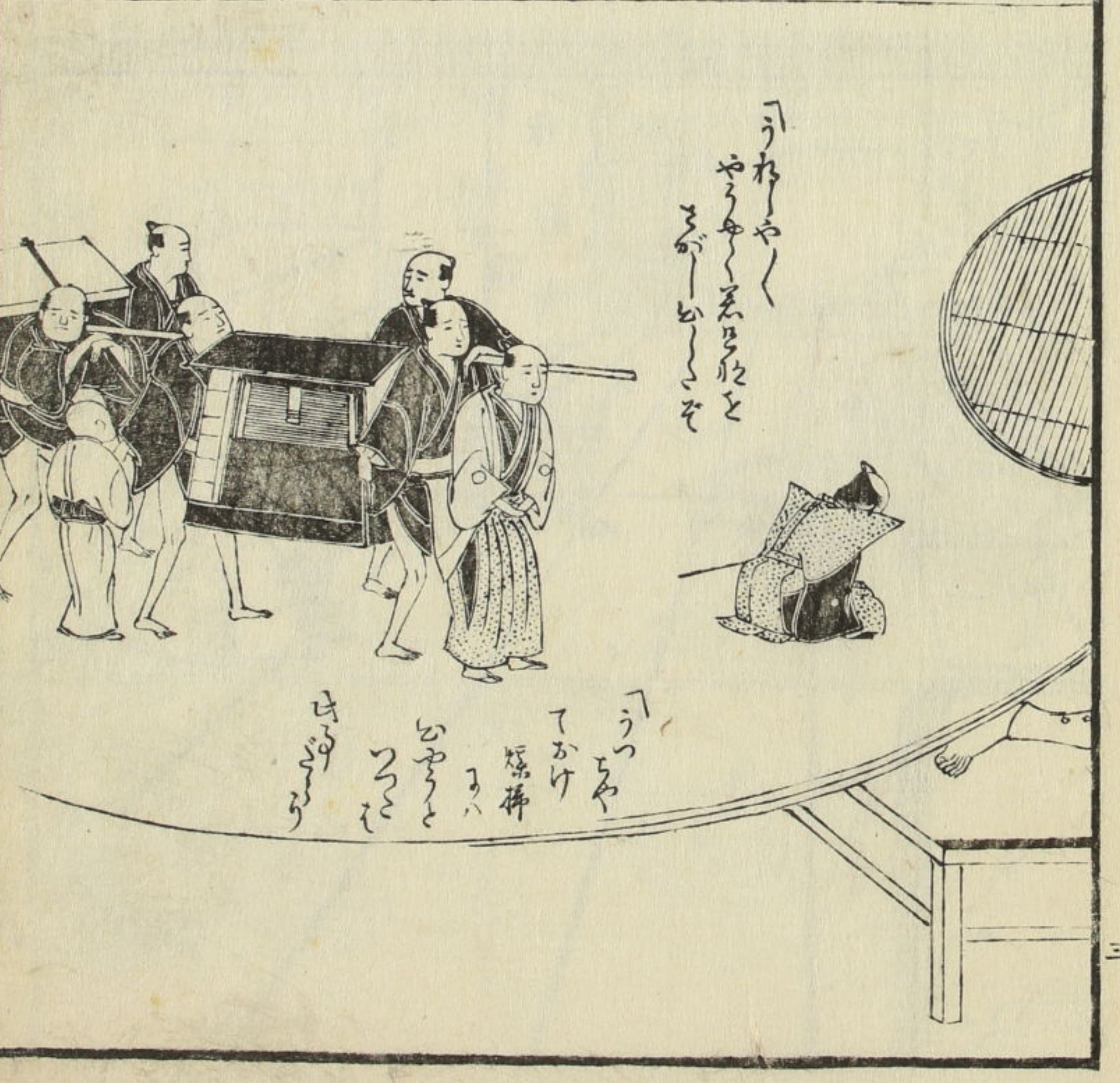
今昔片田舎... 今昔片田舎... 今昔片田舎...



本物 是より石目黒道

佐流年代記... 撰りな名... 廿三の肉... 同日の別...

餅花とつりのり... 餅花とつりのり... 餅花とつりのり...



本物 是より石目黒道

怒りも代源甲而、初の任せ合、
 が衣敷を刷えり昔の染うして
 退出し、今も三寄べき方わ
 う、如何いせし、早も果途方
 ふられて、物ささるが不図、栗の
 梓の言が耳みへり、起上り
 二種のもみして、洩への栗、保ふ
 ち、吾もみ文料の、し、りて、栗
 花と、櫻、一、既、ふ、三、十、年、も、す
 世、人、同、一、世、の、楽、も、終、ふ、栗
 儀、一、回、の、内、の、や、と、初、め、て、悟
 り、世、傳、主、要、へ、引、込、け、り



事昔早馬

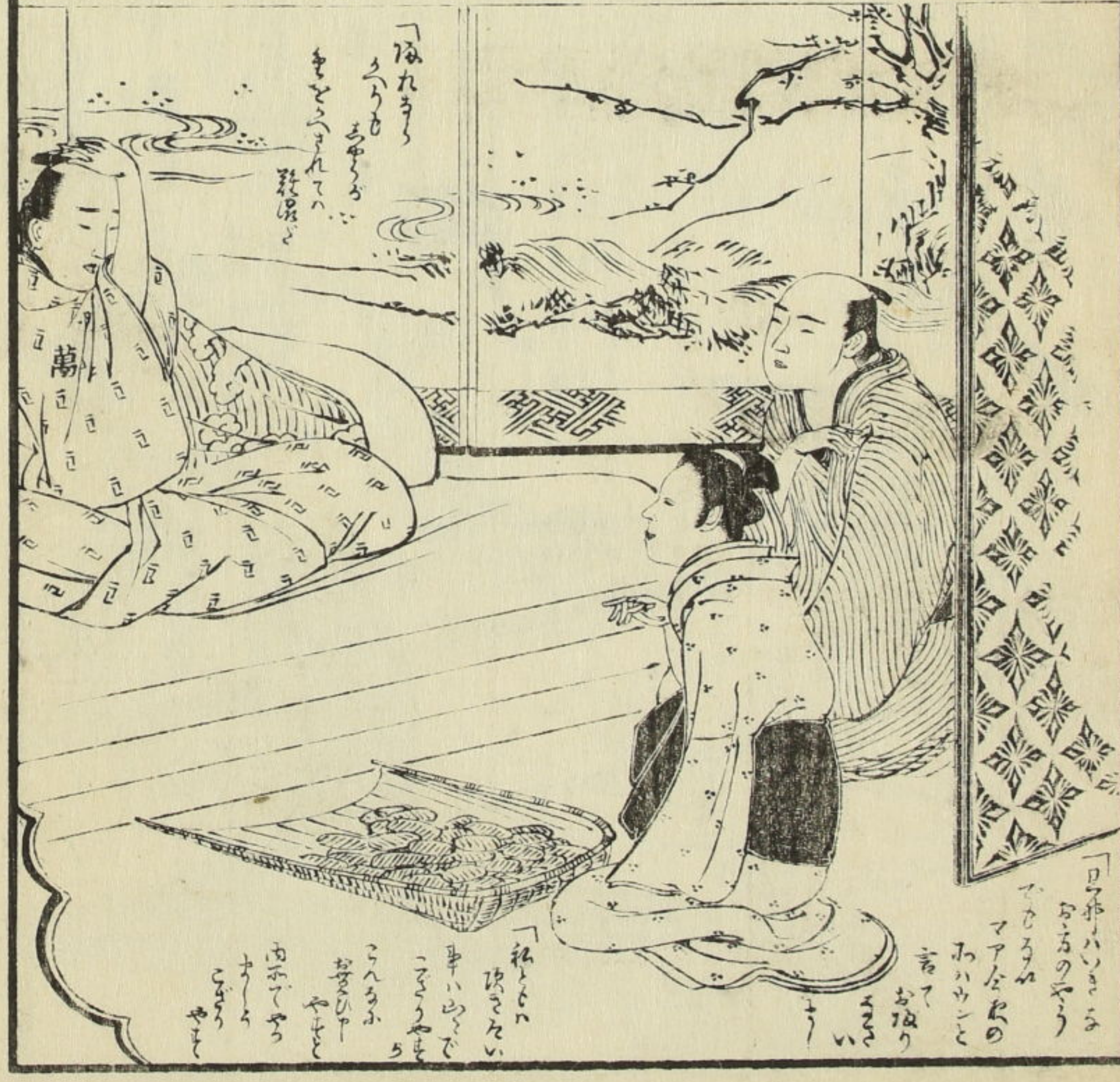
順廻能 名代家 莫切自根金生木 千代女 天明五巳年出版

涙、貧の病あり、持て、病あり、金、が、歌、と、子、例、々
 たつ、二、百、兩、と、い、こ、の、あ、つ、た、難、け、と、感、心、し、て、あ、ま、り
 何れども、兼用、し、て、も、不、足、だ、う、け、そ、こ、の、ふ、ち
 入、我、家、に、ぬ、れ、が、泣、く、と、れ、が、こ、ろ、ど、と、ち、ち、張、さ、う
 染、染、年、何、う、難、波、乃、あ、一、早、く、う、せ、く、よ、進、つ、つ
 貧、三、り、の、よ、思、事、を、教、え、ん、と、一、可、つ、部、の、氏、草
 紙、も、友、人、唐、来、を、和、が、か、も、う、ね、ま、の、世、放、題、を
 む、事、も、ほ、れ、や、ふ、あ、や、う、の、こ、

和光目人 小

新古今和歌集 卷之八
いの外並ぶるづも久金をせよ
ゆき風でし来りし内ふりし
圓して時敷く金とる集め
もろい事ごとくつて強しほ
お返しつ女席屋の仕立ふ
紫いで秋の明も侍らひ
中より駕小乗と赤小乗の
志ましと入つて四五百
布小金のあら客まわつ
をいふは是れ又盛り付ら
色いせぬうき空めのふり下り
ていさむらうと語りし
と後ろの衣の駕界が
有し金と積りて返り来り
体お押付しゆまは金く
ねへのどくおえうけを

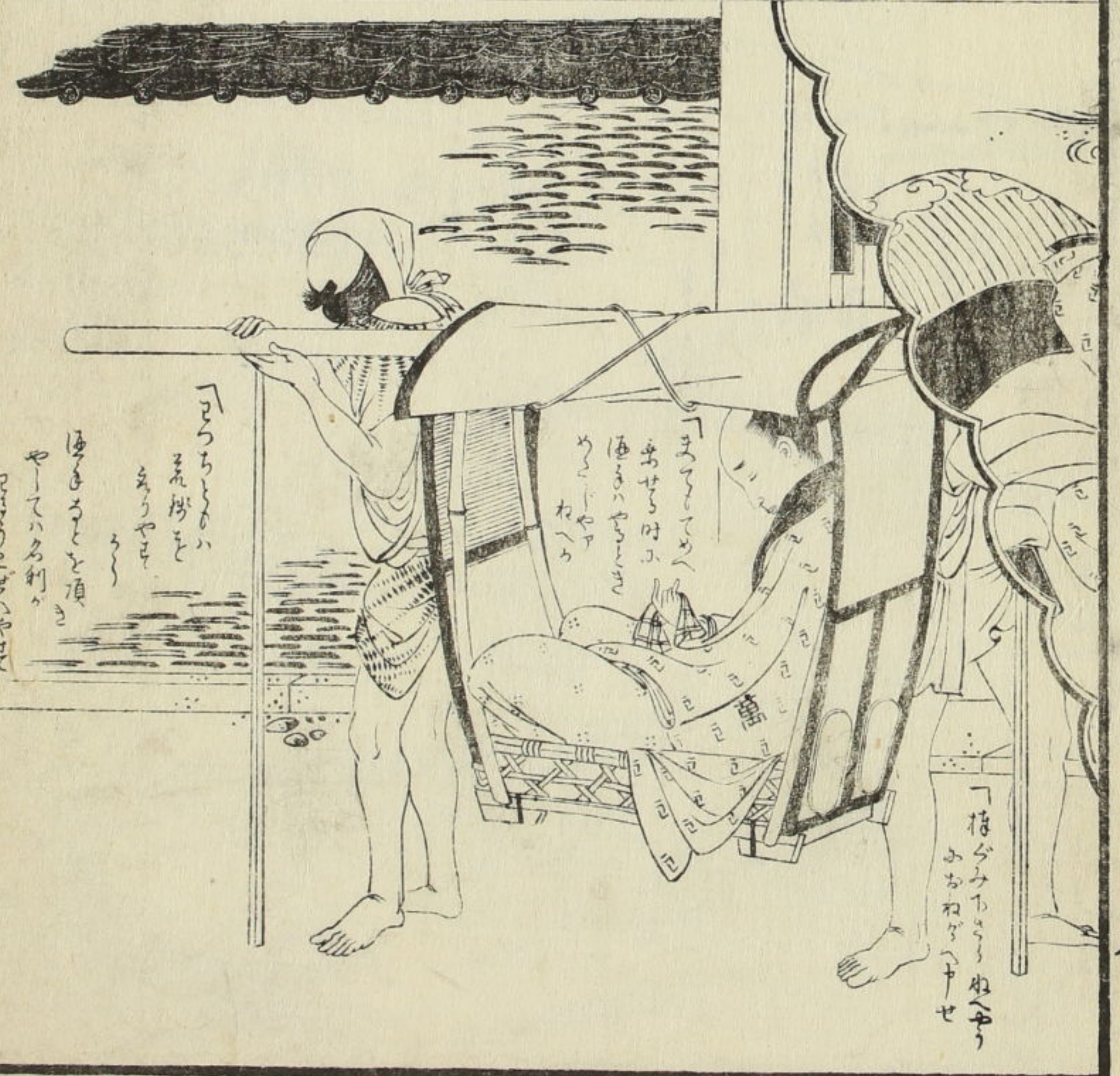
いの外並ぶるづも久金をせよ
ゆき風でし来りし内ふりし
圓して時敷く金とる集め
もろい事ごとくつて強しほ
お返しつ女席屋の仕立ふ
紫いで秋の明も侍らひ
中より駕小乗と赤小乗の
志ましと入つて四五百
布小金のあら客まわつ
をいふは是れ又盛り付ら
色いせぬうき空めのふり下り
ていさむらうと語りし
と後ろの衣の駕界が
有し金と積りて返り来り
体お押付しゆまは金く
ねへのどくおえうけを



「お返しつ女席屋の仕立ふ
紫いで秋の明も侍らひ
中より駕小乗と赤小乗の
志ましと入つて四五百
布小金のあら客まわつ
をいふは是れ又盛り付ら
色いせぬうき空めのふり下り
ていさむらうと語りし
と後ろの衣の駕界が
有し金と積りて返り来り
体お押付しゆまは金く
ねへのどくおえうけを

昔のねごころを
とらばか駕まの
及對をすまこ
んちのさう
現今の要車ま
い皆い流もま
りむるべし
是を車又仲
間がうてシヤフ
小座をまて檢込
ねては困りませ
くははまませ
ふはりの内小
てしまくとら
ミ下されべく

いやつとく言ひのから架のまよ
降り細いし何の事とてまよ
云へんか俵がうととやうと云
かりてまよふる 財布を首巻
付て伶俐野市と思はなり
来り及(まき)ねま(ま)は
るく金と積りて返り来り
減らねと苦うて返り来り
女の中も格やうと云はれ
米の買置とて下りて見て
佛し格をせんとおい付代
も言付けて流金の米を買せ
する格の事(間)は
ハホトくと弱りばは盗人
らせらうりおよみ候は
花より金とまか(家)を
ねし



「お返しつ女席屋の仕立ふ
紫いで秋の明も侍らひ
中より駕小乗と赤小乗の
志ましと入つて四五百
布小金のあら客まわつ
をいふは是れ又盛り付ら
色いせぬうき空めのふり下り
ていさむらうと語りし
と後ろの衣の駕界が
有し金と積りて返り来り
体お押付しゆまは金く
ねへのどくおえうけを

世に... 金の...

は挿画の女葉
お翠のもの
いさみ肌の人
ナゲク女子
てわやき法
の流風俗
サキウ女の風俗
ハ他葉の及いぬ
あや

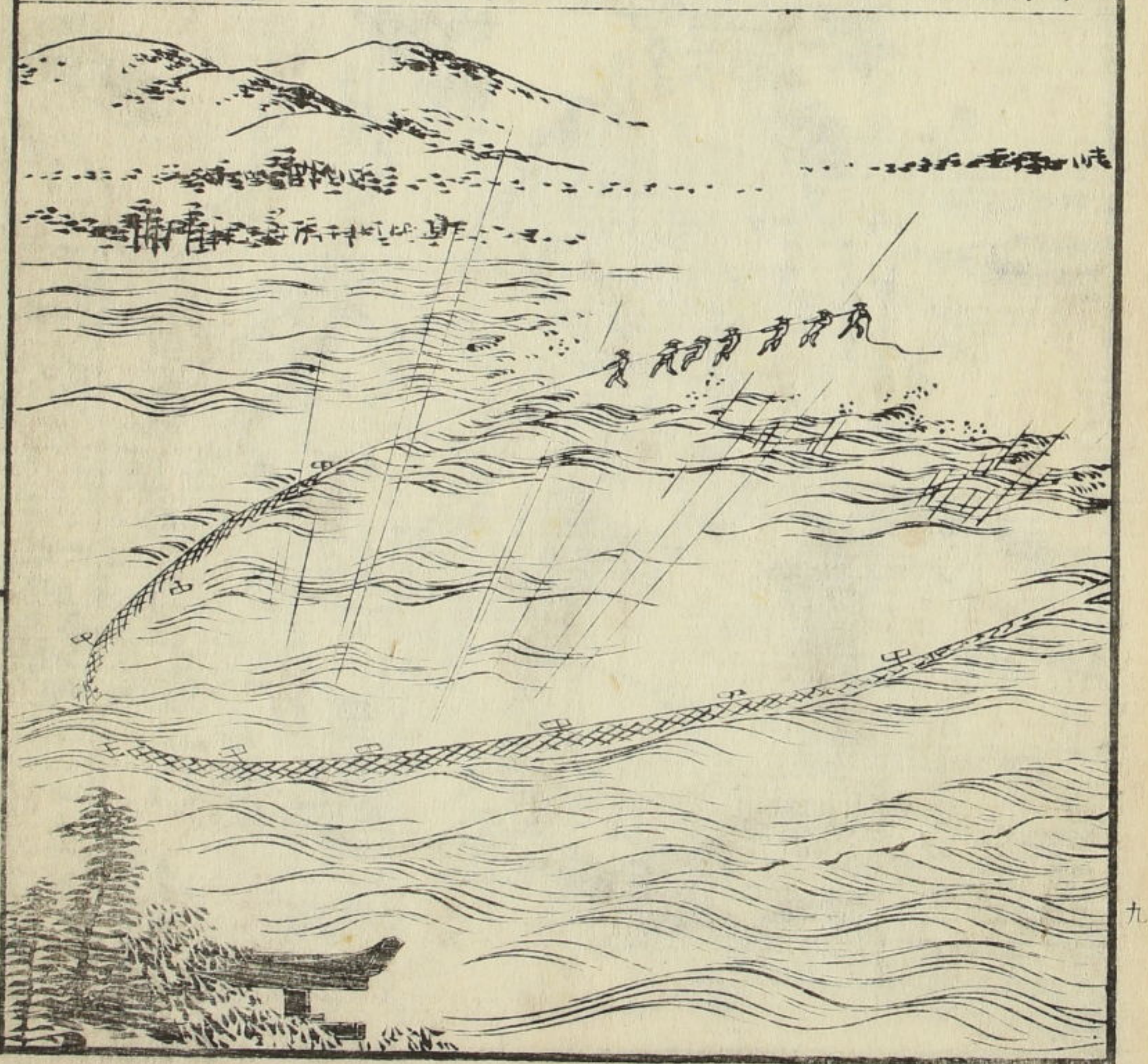
このてね...
ナゲク女子
てわやき法
の流風俗
サキウ女の風俗
ハ他葉の及いぬ
あや



「可る四の
まわりの
のいろ

江の島...
か...
さ...
も...
ら...
原...
又...
地...
エ...
ま...
つ...

江の島...
か...
さ...
も...
ら...
原...
又...
地...
エ...
ま...
つ...



大... 通... 世...

世... 金の...

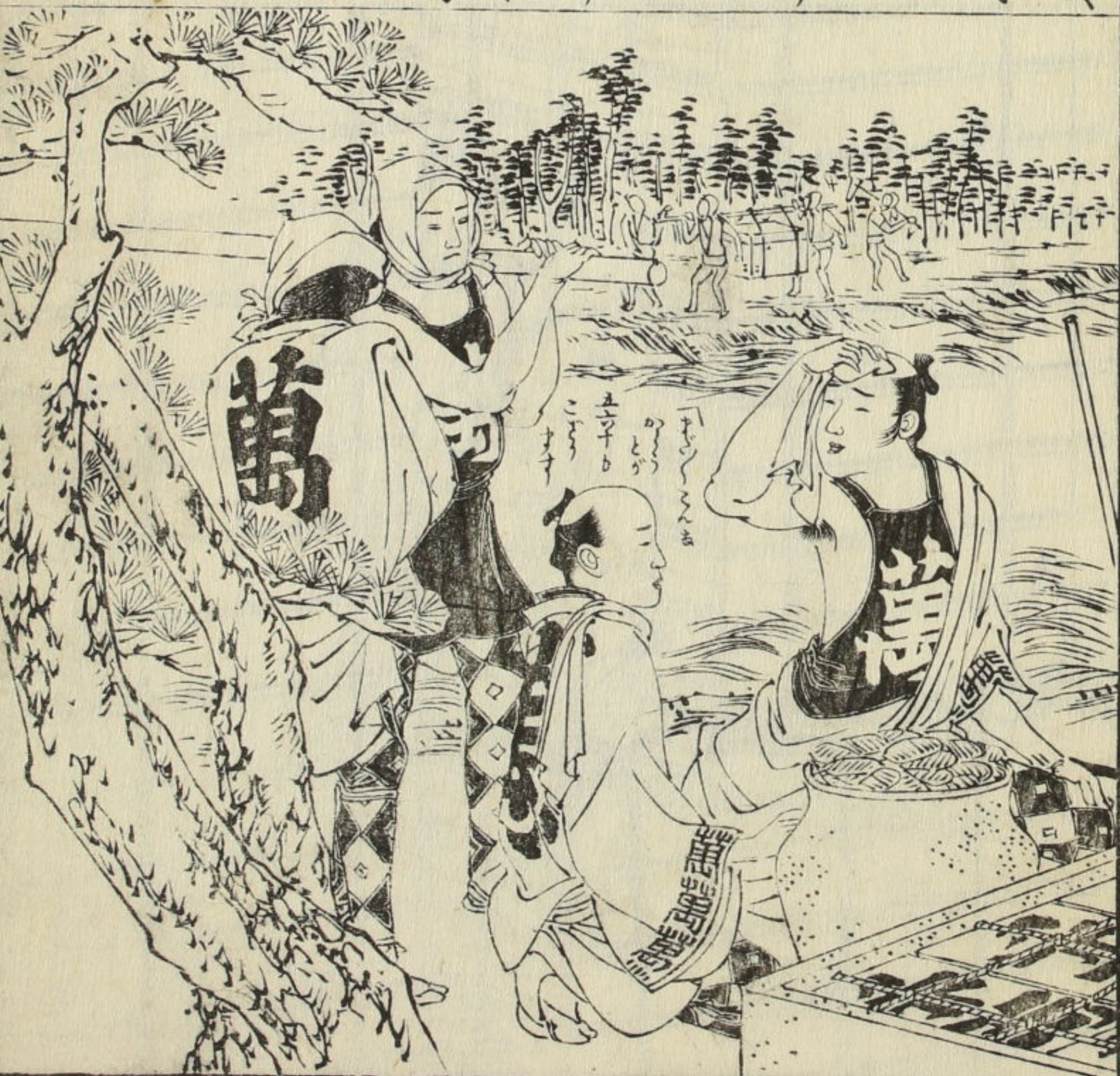
比挿画ハ女葉
 小娘もものち
 いさみ肌の人豆
 すがら女ウ
 てわらき法
 の花風俗うう
 女ウ女ウの風俗
 ハ他葉の及いぬ
 あり

このて私...
 ませけ...
 小娘...
 松原の松を...
 せ...
 や...
 ね...
 小娘...
 わ...
 け中行...



行...
 化...
 又...
 大...
 の...

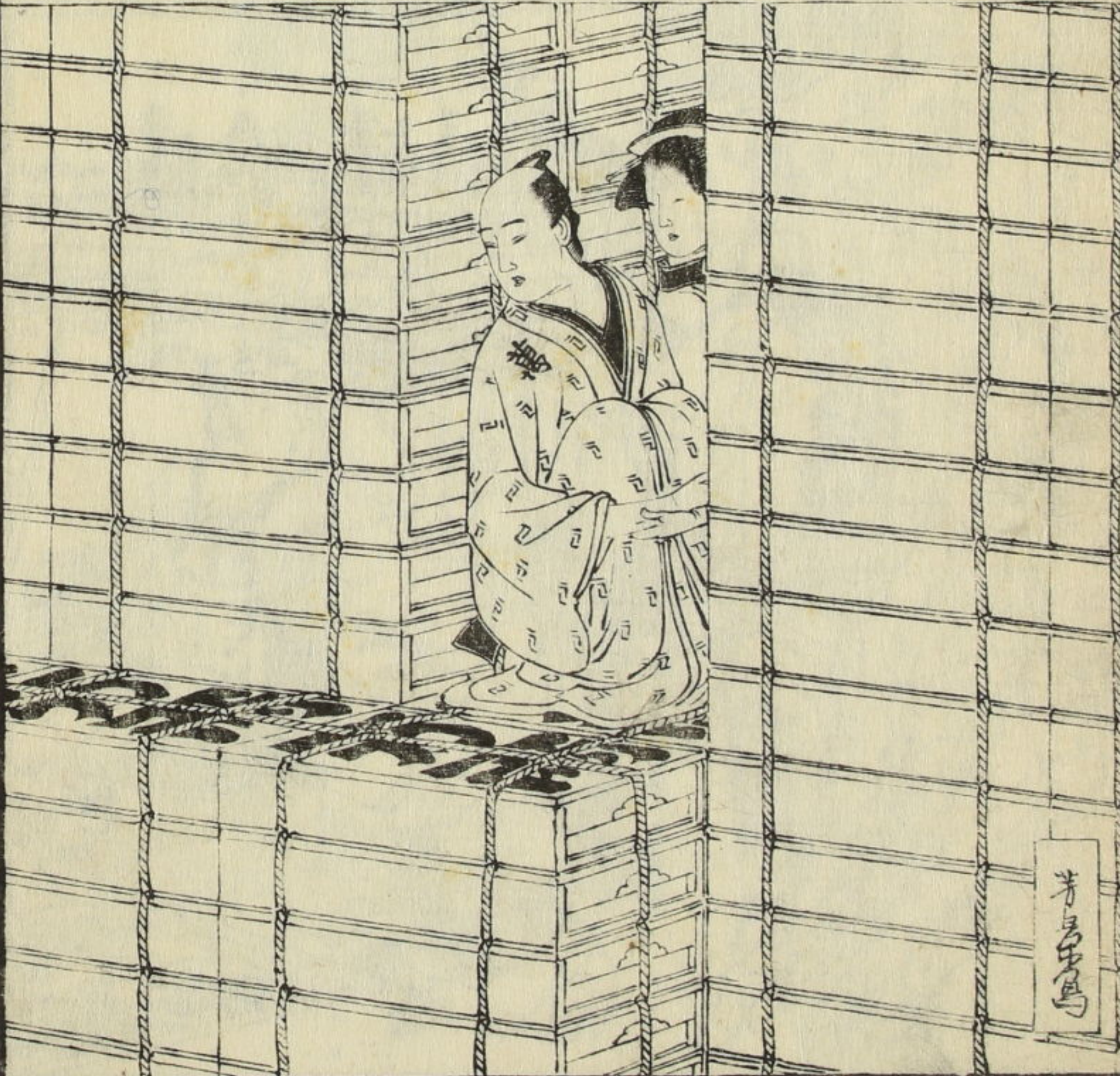
天...
 を...
 打...
 世...
 候...
 と...
 全...
 海...
 今...
 智...
 り...
 當...



加賀の梅枝

いふ金のやう
あつておれ
有ていふく先
はまややき
方ふ困ぬせり
一我のやう
ふるくて雨
うら遠くふ遠
り朝つて親
段ハ一
のサ

家の棟へておれ
推る金
はらうま
依共
とら
星飛
押付
はれと
居る
とほ
只後
ハ帰
福



芳島

京庶子
無間鐘

梅枝傳賦

山東京傳画
天八申年出板

梅が枝が
水汗
澄林
永
か
る
給
の
梅
て
ん
ら
去
裡
裡
て



思ひ
花の
才

加道... 梅... 傳...

氏様は岸跋
 三百五のちいおけ月く三夜の畑
 三買れぬものとまふ古く菊と無り
 らして真無間帯無間鏡堂向のう
 ねがあびる感てまであつてさび
 りのまへに煙と測へてさぞ板ねを
 るねは頭まへを大所の名場か友人
 で田町の寄(十)ちあ典物か入て今
 で板料をきつて居るひき金作種
 さうして一月も前うぬるる
 かねの金さうして三三百あま
 とはさうしてどうしてそほあま
 が言へるわんご上原橋枝のあま
 ちい女と係り足尾つて困るといふ
 るとどうううううううううう
 と彼を向の種がふふボーンや
 更合たり



君... 陽... 夕...

聖大所の大日
 坊の法... の
 狂玄の...

傳(の)母(の)種(を)播(時)有(得)自(在)
 心の伝(と)ひ(か)か盛(衰)は(小)洋(う)る(れ)か
 け度(三百)五(の)金(を)足(取)板(て)や(板)
 む(ば)ま(ま)の(種)の(名)を(れ)も(成)す(候)
 一昔(海)川(よ)ま(う)う(金)と(え)揚(る)
 法(屋)の(め)り(と)結(ま)の(茶)を(切)切(向)の(積)
 金(と)して(流)る(僧)有(利)息(も)え(け)る
 中(身)金(を)ま(ま)か(は)流(取)夜(て)ま(る)
 事(成)が(今)海(川)ま(ま)う(し)金(も)
 五(つ)や(毎)年(海)の(花)火(の)伝(を)り
 外(川)も(う)る(金)と(こ)う(く)ま(ま)大
 き(の)園(の)朋(友)の(田)原(ま)の(種)ハ(結)
 ぶ(ま)ま(ま)不(ふ)や(て)活(う)る(板)奴(ふ)
 結(ま)の(板)棟(を)れ(海)川(の)金(を)ま
 物(ま)ま(の)三(百)五(の)種(を)怒(え)と(お)
 濃(ふ)ゆ(く)一(昔)今(も)昔(の)語(り)

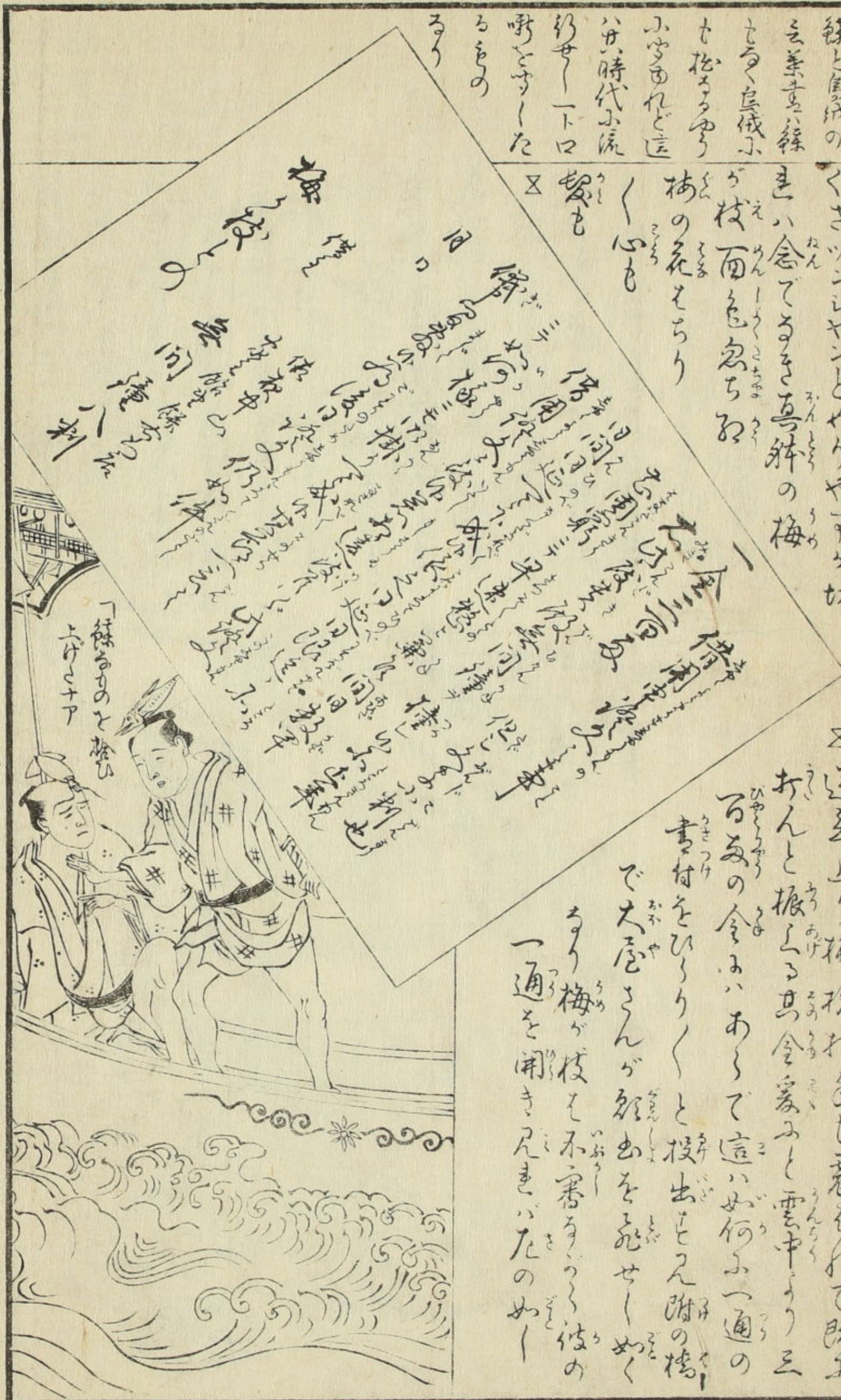


加道... 梅... 傳...

君... 陽... 夕...

梅の便財

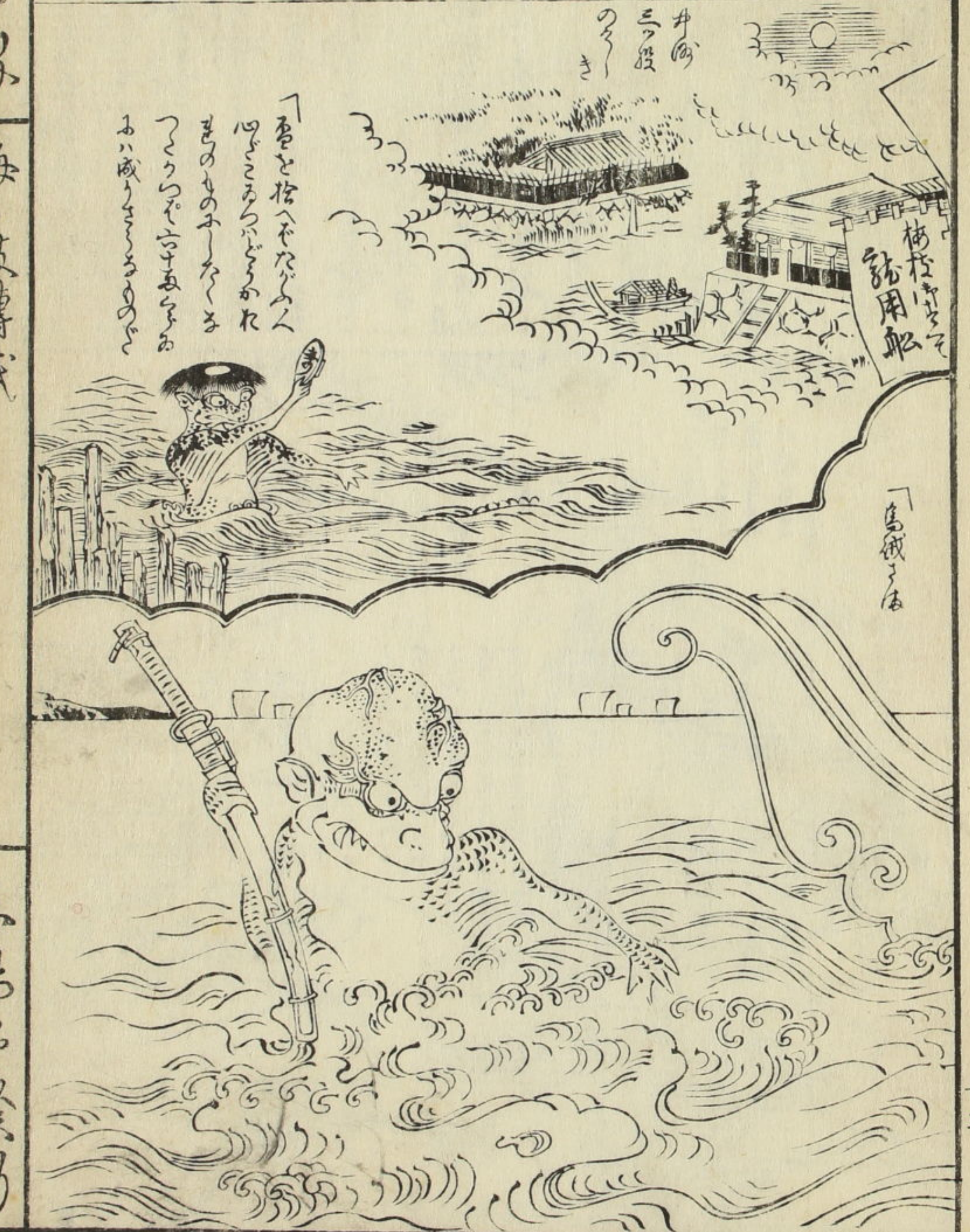
縁と馬成のぐさツンヤンとわりやすが切
 三葉草の縁まは念でるさ高解の梅
 ともくは成小が枝面色あちわ
 小つゆれと巨梅の花そらり
 江戸時代小流の心も
 野さすいた
 るもの



△送るより梅枝持ちも手取られて既ふ
 打んと振るる其令家ふし雲中より三
 百歳の令ふあゝて這い如何ふ一通の
 書付をひりくくと投出せ足附の梅
 で大屋さんか顔あを亮せし如く
 ちう梅が枝を不審さうはの
 一通を聞き足まいたの如く

梅の便財

江戸の事いふと
 ろいあ人のあ
 うらうらうのあ
 くまののあ
 てあゝあ
 のうづあ
 口はあ
 へとあ
 とあ
 ああ
 田あ
 種とあ
 了あ
 梅が枝がは
 のあ



梅の便財

「吾と拾へたん人
 心もあつたか
 どのものか
 つらういふあ
 ああ

可休も有
 名も多
 世傳師葛
 師坊高な
 り氏も市
 用後師中
 宗伊勢が
 男ふし
 幼名を時
 太師后ふ
 法政師と
 して依て
 依名を後
 寺師可休
 といひ
 かり又
 是知家

彼三万三千三百三十三定の
 猿のうしろふらふの鼻缺猿
 ありて鼻のあつ猿と不具
 ありと笑ひをえり
 不具をねむる後を
 ち海をこも不具をく
 邪をくもをいけり
 不屋をれとて山を梅へ海
 へまをくも作多の
 られを只何のも「世の
 中に見ざるゆげも言
 でんはくもをほる成け
 りと古哥を以て成りて海



三万三千三百
 三十三の猿
 アーレハ山王
 エーイトハ
 と詰りて
 新ふ

佛舎
 魚佛
 等の別辨
 けい内是
 知高の別
 号と足和
 高り後
 たりと
 ちかさあ
 まは天明
 元年出板
 の「有難通
 一字」が初
 依として時
 廿二才な
 りころく
 も翌年魚

へど猿知急の口賢く「さる
 事のままもと更思ふる確
 らざる身は用ひざるなりと口
 答へてけきば小猿太さよ
 怒りたまひ猿を踏らばお前
 したまひなりとねど自
 までの怪怖と迷ひを罪を
 顔ど「猿をををん」と
 高知恵を感こみして智
 恵しくふあつて必ひ付交
 珠極へ入りてく問小生
 を愛つたびさつへと洞を
 流して殿ひもれだ不悦と



文殊支利井

編
 景

傳の名うけ
 「孫会通
 伝」の作
 あり氏の
 風名多き
 もんり知
 らふゆ多略
 十
 崩依い甲
 二才の折
 一して春
 頭といひ
 一以とも
 風月廿二
 いよ夏ま
 り悉しく
 ハ外編よ

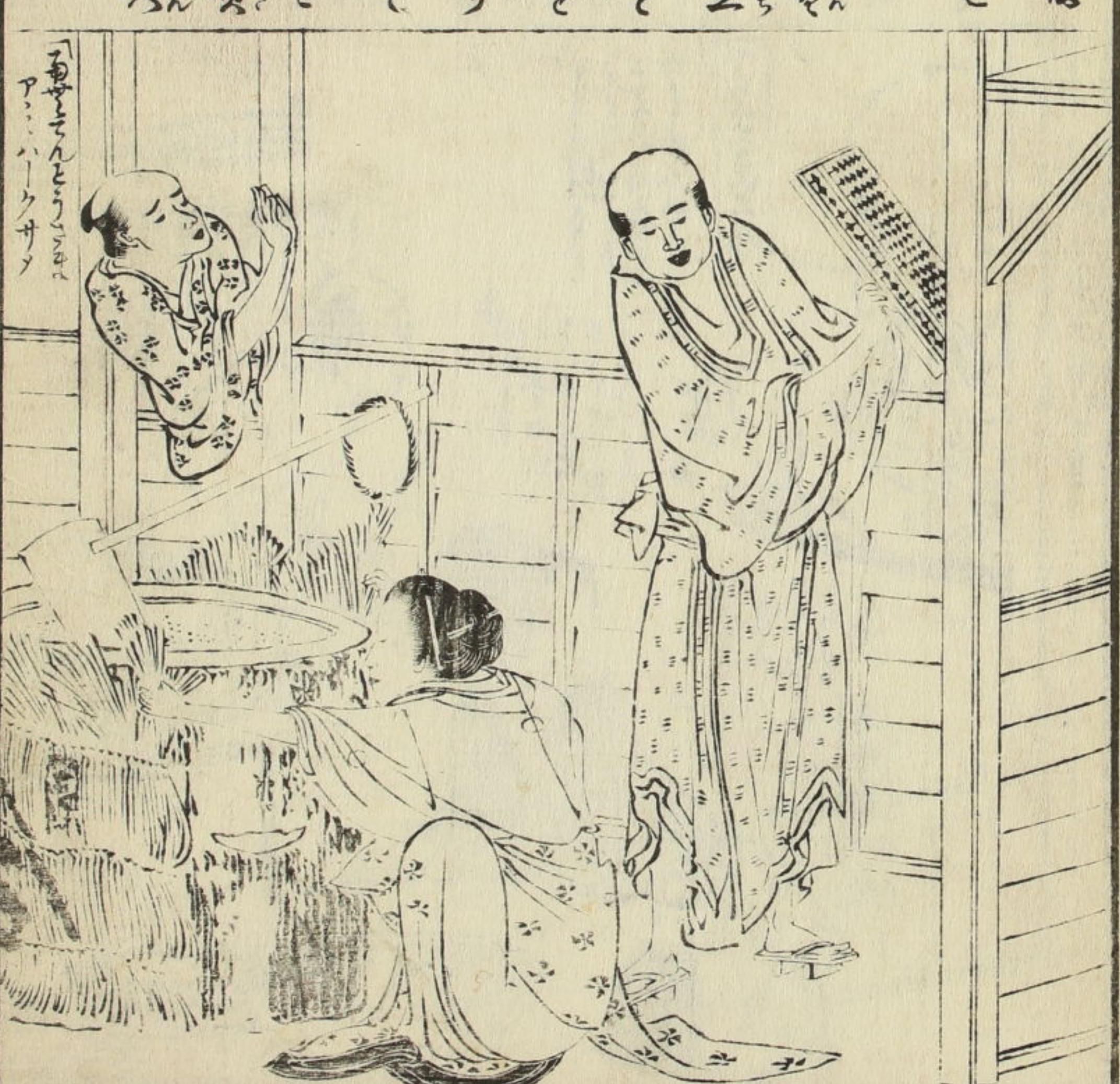
や思われん親分の秋
 如来へおれらるるれ御ら
 ず人倫の交りを免し之後
 不猿どもがキヤツととせと
 一すく親ひるハ「か」中し
 や猿子しとわけ味子
 喧やかりらるるりどもなり
 久珠菩薩の秋ふ依り秋
 迹如来も方便を以て許
 此猿どもも人倫の交り
 ゆる「たまひくれ」を思ひ
 一人の賢用もやとと文
 珠支利菩薩の縁よひり



春陽...

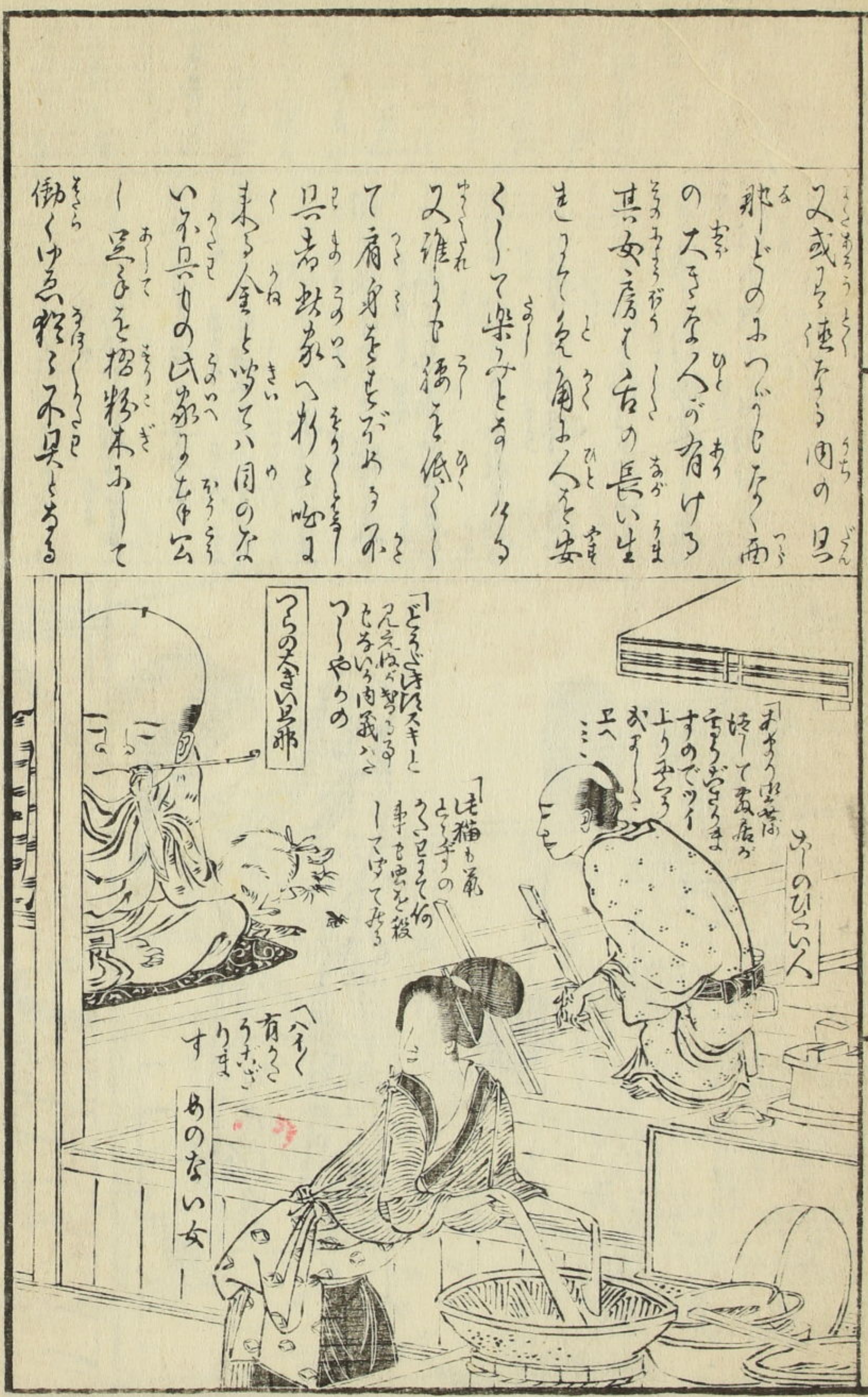
有りて見
 左まふべ
 一
 昔海に浮
 舟渡りし
 見を別よ
 浮教も以
 らず酒海
 て見すふ
 もを
 只虫工の
 筆力も
 以てあふ
 才でうり

せけよふや以げまを海
 くの石具もむしけま
 くららそおそろ一けま
 方てまは生虫を十あ
 して押えまは女房もま
 白く花を巻て樂一を
 たら花を巻て魚も目鼻と
 つけて慰くととれを柳
 らるら牡丹解を踏で
 通う子傳もけら石原を
 やん
 葉籠を引抱えらるる唄
 謡いあれを底間から大
 陽をおい人むあ



大通...

...



又或は徳をうけぬの思
 那どのふつうにさう
 の大なる人が有ける
 其女房も右の長い生
 までく角よんを安
 くして楽くする
 又誰かを強き低く
 て肩身をさぶらぬ不
 具者お家へおとす
 来る金とめて八目のな
 い不具者のお家へおとす
 一具子を招物木あて
 働くゆゑに不具とさる

「どうもはげしく
 足元はなやむ
 もさう内我
 つしやりの
 つらのきいお那
 「は猫も
 とすの
 うごまて何
 事かを後
 けてみる
 「おのい
 おきうお
 けてお
 する
 上り
 お
 五
 「ハ
 有る
 りま
 す
 めのない女

大通世界三十六部 外編目録

一冊三部合本 十二卷
 外編上中下 三卷
 合十五卷満尾

安永出版ノ部

金先生栄花夢 美所画作
 桃太郎後日新 美所画作
 摘無題記 美所画作
 珍説女天狗 通長画作
 虚八百万八傳 四方画作
 天明出版ノ部
 長生見度記 美所画作
 従夫以来記 万原画作
 漢国此奴和日本 四方画作
 無休江生浮言蒲燒 京伝画作
 順廻能石代家 莫切自根金生木 小代画作

御物好茶白藝 全交作
 鳩八幡豆と德利 好所画作
 三千歳成云蚺蛇 京伝画作
 富康子 京伝画作
 毎同種 京伝画作
 花見 京伝画作
 見 京伝画作
 龜龜と草 京伝画作
 親分御目出太平樂 杜芳画作
 子分御目出太平樂 杜芳画作
 弟と川竹 昔と相生松 三好画作

美術世界第四卷目次

序	森田思軒君
小序	宮崎三昧君
源賴義重形圖	菊池容齋筆
牡丹圖	瀧和亭
古代遊女圖	狩野常信筆
嵐山春夜圖	野村文舉
古代役者繪	鳥居清信筆
春景	久保田米偃
沙千遊圖	北齊初筆
藤花狗兒圖	三嶋蕉窓
春塘午景	謝蕪村筆
梅竹噪雀圖	鈴木百年
稻荷祭禮圖	鮮齋永濯筆
雪柳白鷺圖	村瀬玉田
晚春雜景燕散椿絲櫻	渡邊省亭
春日の松	前田香雪稿 川崎千虎画

美術世界第五卷目次

美術世界卷首の書	石橋忍月君
歌舞伎十八番五代目團十郎暫圖	歌川豊國筆
衛立繪妻戀猫	山口素絢筆
白牡丹孔雀圖	吳春筆
古代美男美女圖	宮川長春筆
猿圖	三嶋蕉窓
布袋和尚圖	北齊興筆
雀啄蜂圖	荒木寬畝
首夏田園雜景	久保田米偃
雙雞圖	若冲筆
醉李白圖	鮮齋永濯筆
薪賣畑の媪圖	前川文嶺
昔嘶桃太郎圖	渡邊省亭
附白桃花	川崎千虎
繪馬考稿(其四)	川崎千虎

美術世界第六卷目次

小序東京美術學校教諭	今泉雄作君
光琳筆鶴圖	中野其明縮摹
源為朝圖	菊池容齋筆
明月青稻圖	同
雨中魚市場圖	久保田米偃
古代土偶摹圖	巨勢小石
梅林高士圖	清暉筆
群鶴圖	長澤蘆雪筆
文珠菩薩圖	雪舟筆
普賢菩薩圖	同
郭令公子孫孫斯圖	三嶋蕉窓
山水圖	今尾景年
おやまの形圖	小林永興
雙陸遊圖	鳥羽僧正筆
幽谿觀瀑圖	菅原白龍
幕府時代仕女圖	渡邊省亭
繪馬考稿(其五)	川崎千虎

明治廿四年五月廿日印刷
全 年五月廿五日出版

大通世界一卷與附



者 幸 堂 得 知
 者 和 田 篤 太 郎
 者 全 京 橋 區 采 女 町 三 十 一 番 地
 者 酒 井 留 吉
 發 行 所 東 京 日 本 橋 區 通 四 丁 目 五 番 地
 春 陽 堂

每月二回發行一冊讀切實價十錢十冊前金九十五錢郵稅二錢宛郵券代用一割増

東京春陽堂發行新板既發及豫告

○文學世界目次

半紙木板摺彩色表紙頗美本一冊讀切
實價八錢郵稅二錢十冊前金七十五錢

第一	紅葉作	命の安賣
第二	山田美	猿面冠者
第三	櫛堂作	かくし妻
第四	巖谷通	かた糸
第五	忍土作	辻占賣
第六	正直作	かくれんぼ
第七	廣津柳	いとし兒
第八	幸田露	瓶の蓋息子心
第九	抱子處	黒頭巾
第十	山田美	韻文夢の天女

○聚芳十種目次

本誌は諸大家の傑作小説各一冊讀切
金十三錢郵稅四錢十冊前金一圓廿錢

一卷	香雪著	花の種
二卷	山田美著	新色懺悔
三卷	妙齋著	やたらじま
四卷	南翠著	臥待月
五卷	抱子庵著	闇中政治家
六卷	廣津柳著	糸のみだれ
七卷	三味道人著	戀の重荷
八卷	幸堂著	さきげん
九卷	梅花著	まじり
十卷	櫻庭著	雪達摩

○新作十二番目次

半紙木板摺彩色表紙口畫入美本一冊
讀切各實價三十五錢宛

一番	櫻庭著	勝鬨
二番	山田美著	此心志
三番	妙齋著	教師三昧
四番	三味道人著	桂
五番	南翠著	倉武
六番	學士著	津川
七番	香雪著	梅
八番	幸堂著	蓬萊

大通世界
美術世界

字入小説表紙縮模
半紙木板摺彩色表紙
各一冊十錢郵稅二錢
本誌は諸大家の傑作小説各一冊讀切
各一冊實價三十五錢宛

幸堂目録知標記

文學世界

十卷櫻庭著雪達摩

千子の水も
こころおへ借
らんで権柄
の身ぎらふら
うるといふふ
毎年の異統
と

千子の水も
こころおへ借
らんで権柄
の身ぎらふら
うるといふふ
毎年の異統
と

千子の水も
こころおへ借
らんで権柄
の身ぎらふら
うるといふふ
毎年の異統
と



役師も今度ハ一ツの
とイソノ一ツを起つて居
たる首の蛇をなつて見ま
いつの間よら玉の袋と夏
つたり
夫より又頼朝ハ鶴吉ガ働
きあつて主役や一本
隠息を殺して居るま
ふ不ハ大尾兄才進掛まらふ
一本の控を様こんとつ
務吉家らそ大申の石
玉子を懐ろてあはれ
始ふふ一らえて二人を
欺らうと見えておれも
親を逃まはしな幅が
岸のびららがねもあまの



まめで
おきの
うきと
つて
みる

おまふの
狗先ハ丸を
了付云ふを
殺下師が一
巻捲りて見
おれ候を乞
出して返さ
見おれ候を
今迄は仲
らつて中
くはねな
るけれど
随分つ
ものあり

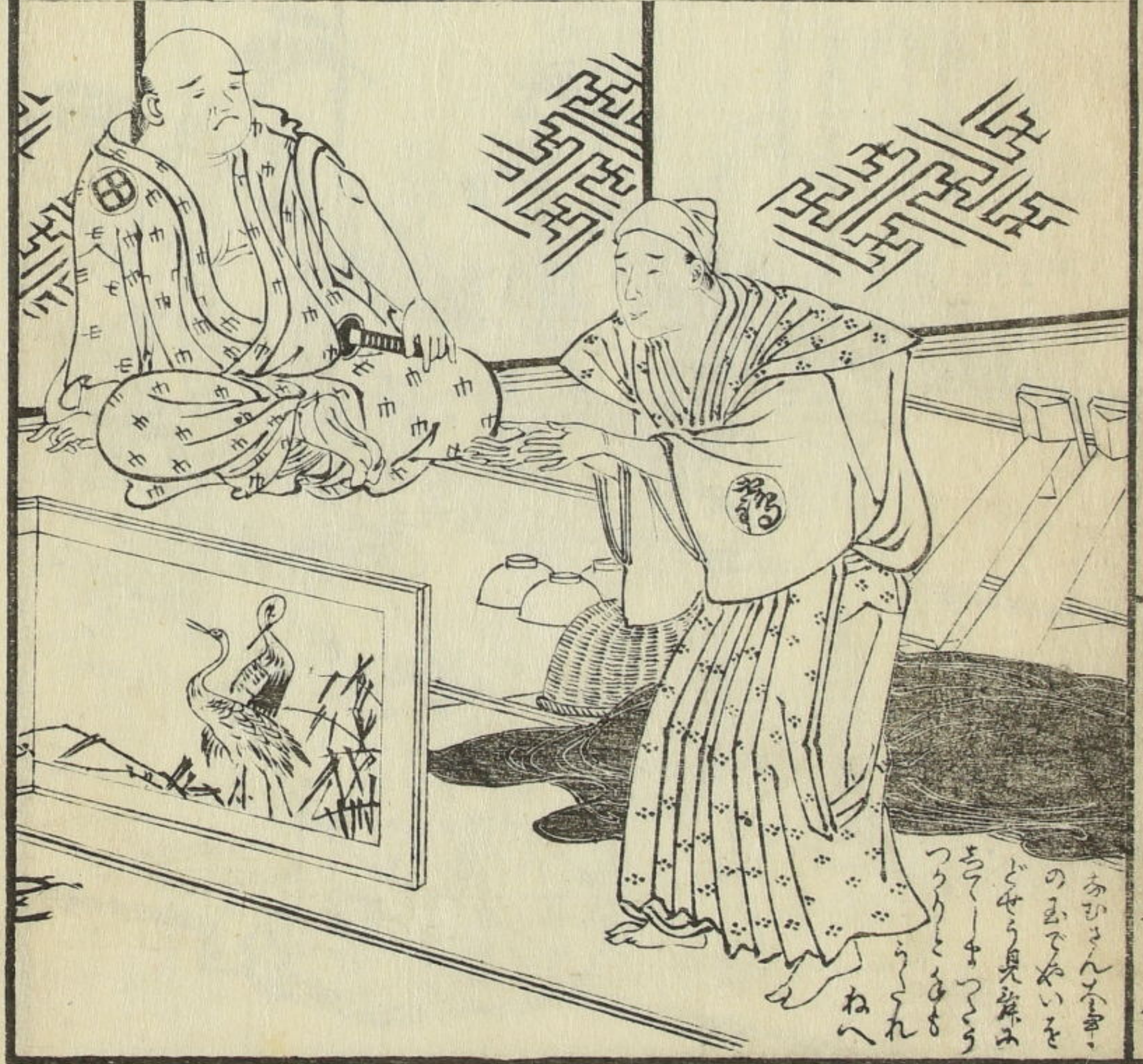


石橋出る
さうわ
さうな
糖だけ
どろひ
かぐい

徳和

はげしみの油
海井屋と
つる代
酒肴ありし
なり
出物の白拍
るい海川の
まよひとい
言ふとまき
り

つら〜 雑を救ひま
二おのゝお抱をりま
まき海井屋とつら
海井屋の井屋が石抱
たの歩を白張の徳和と
下される橋山といふ
出物の白拍子を大幣下
たつる是の余程の故事付
ちれども親玉のふまらゆ
へいびまも妙〜と堂や
まき 勢吉の権便の沼酒
を橋で飲むを志す〜と仕
方多糸治とつら海井
脈を招待中〜 既に飲

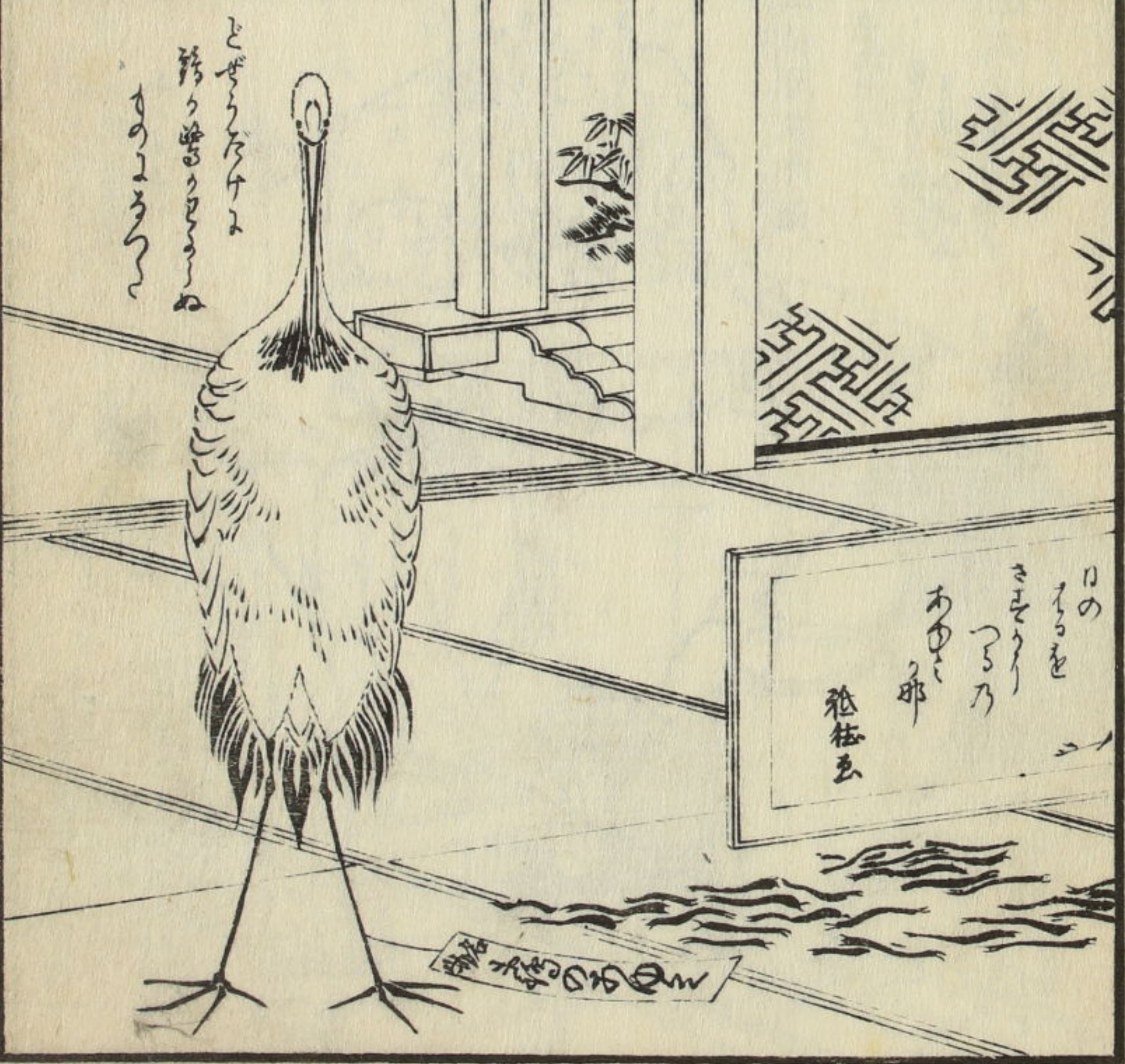


あむさん
の玉でぬいそ
とやう見舞み
つら〜とま
ね

春陽堂發行

はげしみの油
上の軍持袋
其以代の放
下海井屋の
事〜を信び
た〜とま
別は信者の
互徳もあ
さ〜とま
み只〜とま
米事〜とま
徳川町代
信〜とま
井の〜とま
る〜とま
か〜とま
の〜とま
おひ〜とま
作者のつら
つら〜とま

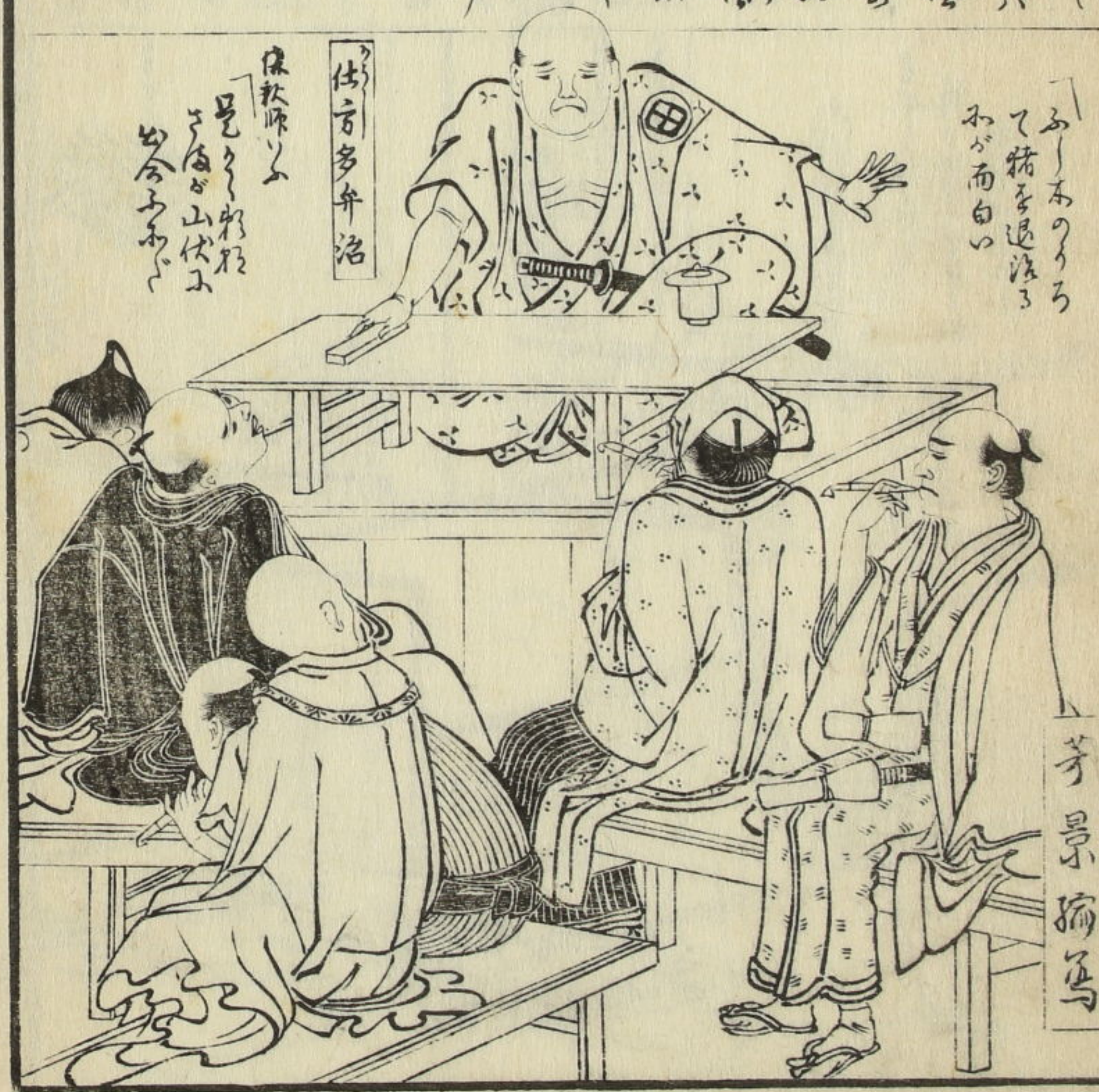
んとせ〜 ふ忍識や例
有〜 徳利の像を音を伸し
能の歩むが〜 見へるれ
流石の放下脈も行を度
〜 ぬもな〜
〜とまを拍り〜 貴けま
〜とま中よ石を〜
浦り〜とま 勢吉の
と成り〜とま 是は
〜とま 同遠へ〜とま
〜とま 信者〜とま 見へる
り勢吉も〜とま 勢吉
〜とま 見へ〜とま
勢の形ち〜とま 勢
〜とま 勢
〜とま 勢



とせ〜とま
勢吉の〜とま
もの〜とま

日の
まき
つら
勢
勢吉

海神師位方多年浴
眼高身具一筆一筆
頼朝一代記の小説を由
井が深くて深くてけろ
かーちる八を定ぬ由
其以入るる浮刺る由
井が深の小説を由
行くと群集駭く
毎口と目と半を
譯者とも愛ぬ美り
小説義のなり



保秋原
是く形
山伏
山合ふ

ふありのろ
て猪を退治
おが面白

茅景痴馬

廿日余 畫用而二分狂言
四十兩

由喜馬琴初依
寛政三亥年出版

秋の風といふ美し
の猿口をぬきて災ひの門を守る言や在
も舌をゆらまて一生をらやすべしと相念
の不言も則ち佛の方便とこそいふ人こた
まの大神を祈りたすん

京傳門人
大業山人誌

由馬琴名
 解家預吉姓
 八瀬川通稱
 右馬やう元
 飯田中坂下
 の家やうり
 は御六馬琴
 が物やうの
 りしやう大
 弟ふんとい
 ひしう後年
 京傳人十
 弟ふんの名
 あらものハ
 菊うは月買
 るつて皆焼
 棄しといふ
 依今二分程
 言ハせし橋ふ
 り

茲ふてうつて馬琴といふ者あり世ハ
 衆の杖の村安と云ひぬの身竹之
 お似たりと云ふは竹の志し頻りふ
 して芭蕉庵の田舎をうまひ津川
 の八幡(系譜)とて園女橋も今名
 みと昔とてひておふはふを源の歩
 行行他送と云ふと棟敷(通称)
 うふふ思淑さるる其書も誤り置
 とおがしは棟敷の繪馬の元
 け出廿中おも橋の繪馬と云ふ
 は御つてやうとて娘らつふ息ち
 山師の子も渡りてあるありの落
 箒張小生心と云ふといふとお家の
 樹をけうひ敷の松一尾の己
 をとつて壬午の小孫といふ置成
 とするは巻の繪馬も人間中



南條の通鑑を
 初会ふつて
 茶後やうり
 思ふといて
 わる後と云
 ふ

へいぞ出ていふあふつていふ
 以茶と云ふ漢一巻巻の程を
 思ひ出して十六七のおんさうてあ
 きやつと化し其外皆と云ひくふ
 わけはらう

繪馬の村のさうまお校生を元
 が繪の後出するれもの言はし御
 思ふと看たら去付はひ居て
 くふはをつまげもの何ふより来り
 して先今のふんがわらうは
 巻の繪馬はさうまの性水をおゆあ
 水辺でうけまは付まはし御
 来りはをほてらうせう十師の
 繪馬はらう張てんといふ
 巻のつらやう

巻の繪馬は二人連とて巻を



他物箱入娘
 將門時代世話二挺鼓
 秀師 寛政出板、部
 天下第一面鏡梅津
 金堀、中本 黑白水鏡
 本樹真猿浮三章、劇
 俵藤太振出百薬
 大平記 玉磨青砥淺
 幸嘉鏡 三藏園會雅藻粹
 大徳記 心學早深草
 諸合奏 年寄冷水勇我
 廿口余 書用而二分相云
 四十反 大京山人八馬起分ナリ
 一程言瓶書入
 電將軍部略之卷
 可作、此言ナリ

荒山水天狗泉祖
 史南本 俠太平記向并卷
 二日 智
 享味出板、部
 智意文珠 馬鹿階三薬 一九五作
 外編 三冊
 又續五 科史信説年代記 三馬忠作
 津野船 和祥大阿冷雪清潘清徑
 馬馬六石家合巻、草稿ヲ加フ
 右三平六種之五合也近々出版
 仕作
 板元 春陽堂敬白

明治廿四年七月廿五日印刷
 全 年七月卅一日出版



標註者 幸堂 得知
 東京日本橋區通四丁目五番地
 發行者 和田 篤太郎
 全 京橋區采女町三十一番地
 印刷者 酒井 留吉
 東京日本橋區通四丁目五番地
 發行所 春陽



郵稅二錢宛郵券代用一割増

大通世界二卷與附



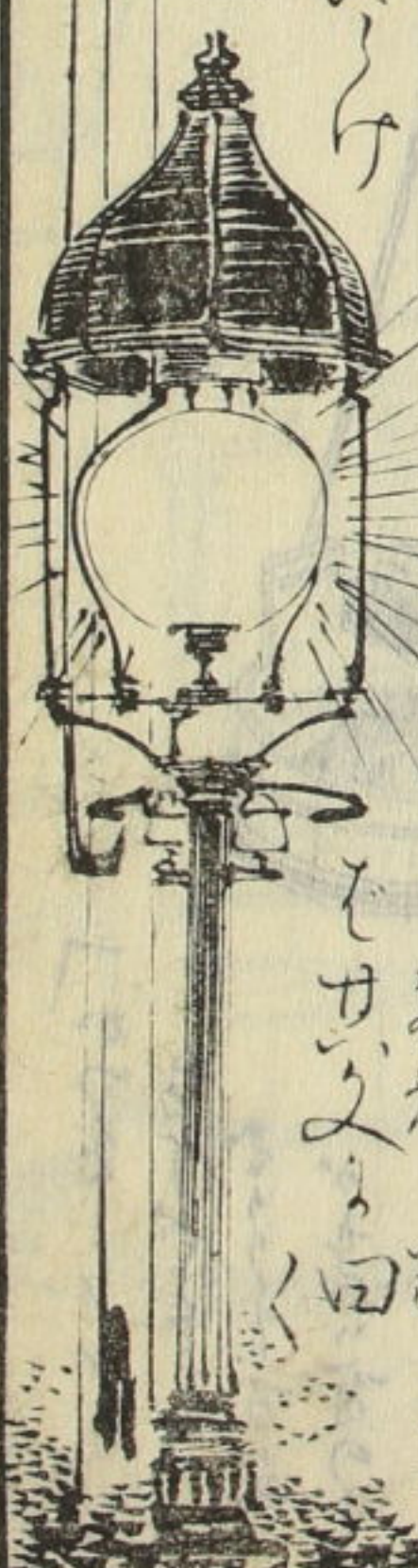
大門口見入り松

楠無益委記叙

玄川表所画作
安永八年出版

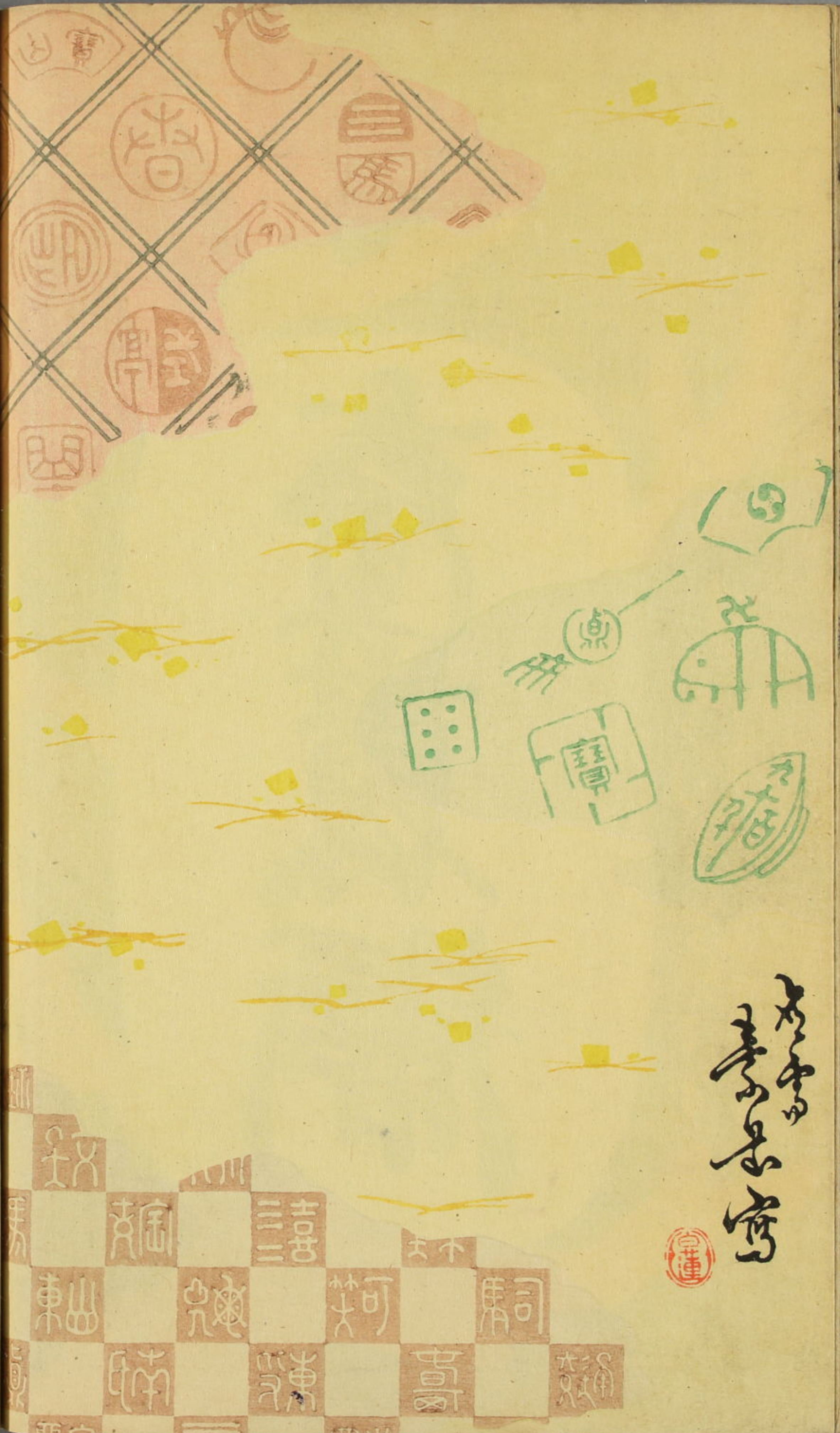
楠多門台術智願政といく天室ふよ一多記にむ
ふんをともらん中宇治の山姥奇九幸が問た
つたつてほく世間此何りて後を見ろく其
変る事一まはるく何蘭陀細工の絵
の如く一まんく然たるもの葉むいふ
こころうともしんを忽然とて庵りうけあ柳
息子の一すつ親父乃どくらく程更休期
あつづのびと見徳る子乃書置をうえり
け末まやりの無益委記をいけ

廊中たそぬ電燈



楠無益委記

春旦勿堂發行



玄川表所画作
安永八年出版



は神史の青
時の男女の
風俗をえり
べきものなり
中ハ先細ホ
似と人者有
下やてえ
たまへ

四ツ子車
と考へらハ作
者の大働さふ
り現今の力カ
車の愛唱人
は作去の送
言もあま



大通の羽織長
車三入ハ寸
五六分紐ハ踵
ハとぎき素襟向
刷毛
先
福平
の
帯
居
風
呂
の
襦
袢
の

是より右吉いり

「とて甘のるふ葉
屋よりお引を
かいておけを
よい

四ツ子車
出ま
急ぐハ仲代
をそらむ

吉原細見を
言れと一ハ
子柄



「尾のたぐいのハちよび
とこもて

吉原細見を割れ

細見
儚
うれ
る

「棒紐ナント
桿ケタケハ
ぢやア
ねハ

「今ハハ
ぶ車のせ
味

大通の羽織長...

春陽堂發行

坊主が天下
をわたり肉
衣帯を
見通し
是又作者の
名をいれ入
なり

宝徳寺
宝徳寺と線
香堂とせり
みーたもの
宝徳寺の
坊主が
くつ

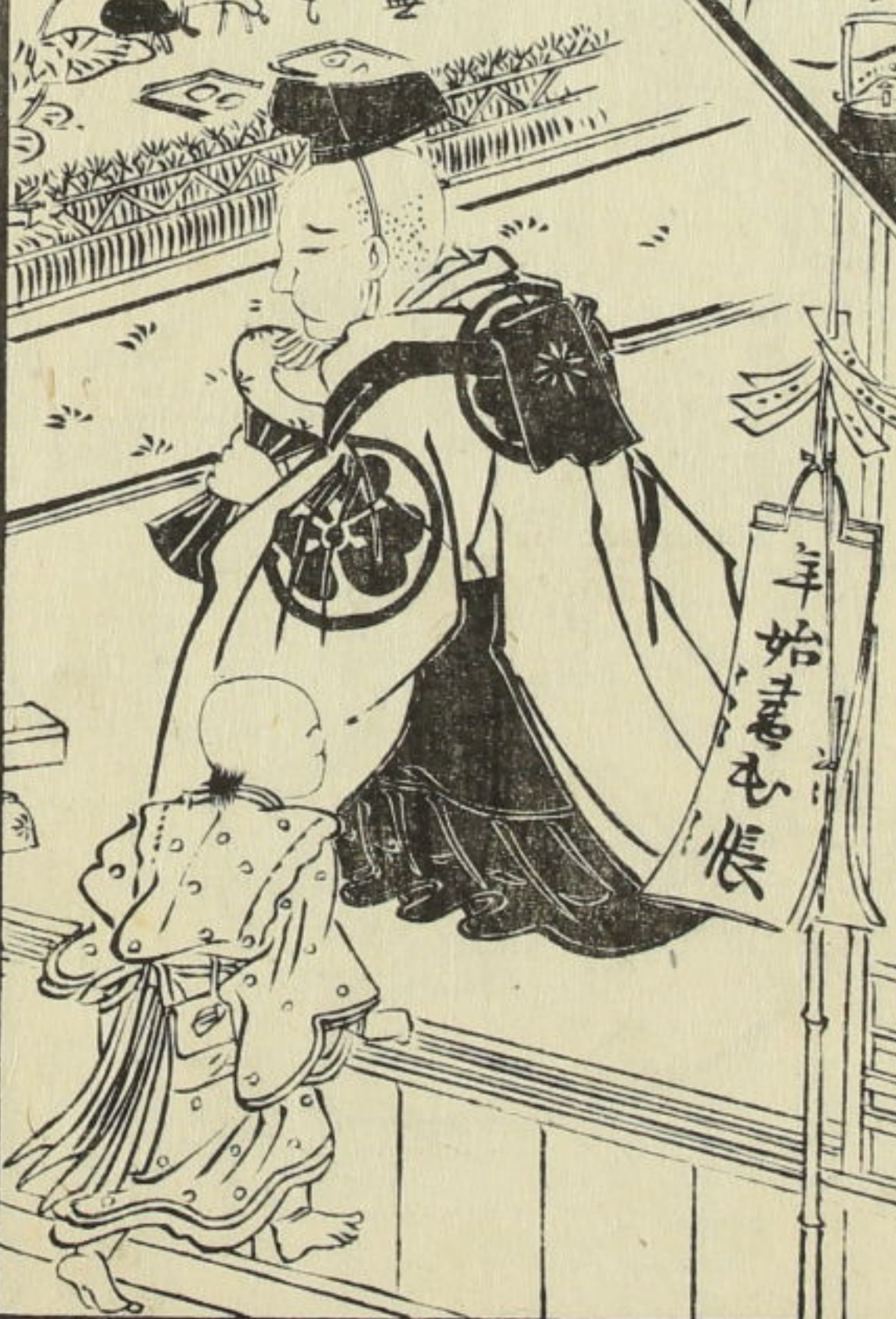


「フヤク」
大さき座
でせう
達大酒の
お宗分秘
ありん

徳義小南無
ざんといか
榮えて
すふ
すん

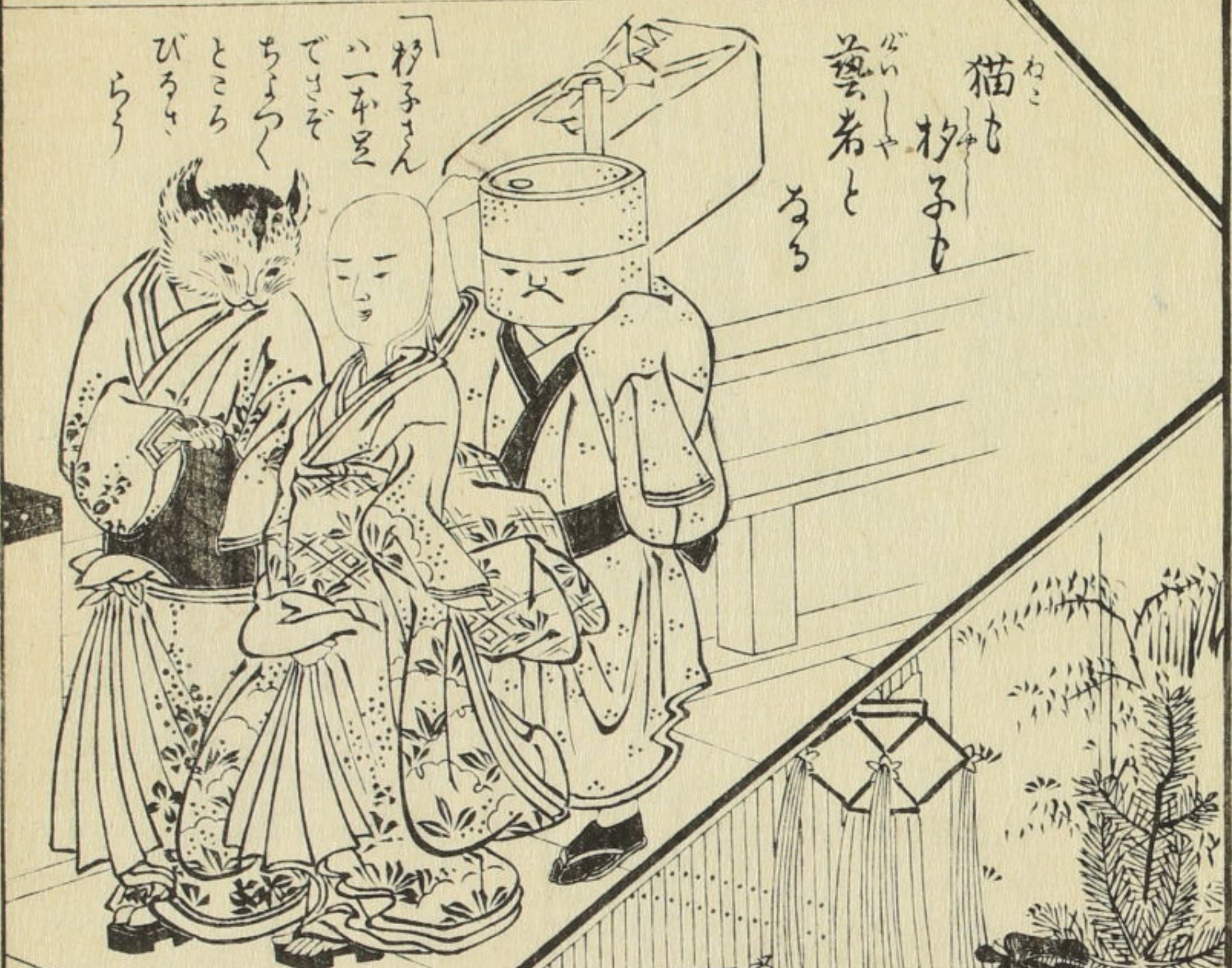
坊主が天下
をわたり肉
衣帯を
見通し
を買い俗を
つて陰馬を
買ふ

みまて
三河
石冢
いづ



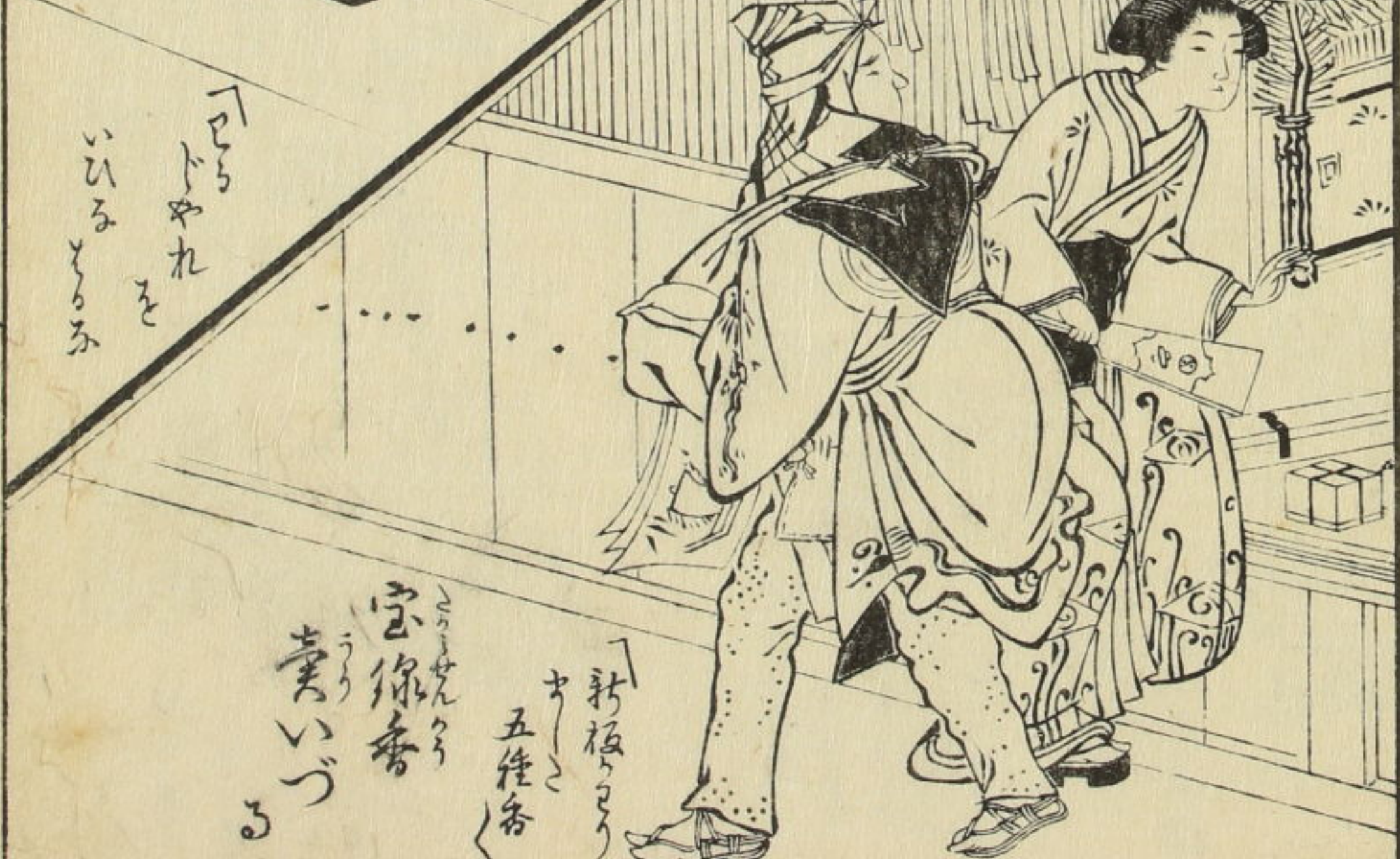
年始書心帳

猫ハ猫
て猫
子ハ飯盆を
兼
ウシテツミ
今ハ猫が抄子
ウ抄子が猫



猫
抄子
藝者
なる

抄子さん
ハ一か豆
でこそ
ちよつ
ところ
びろ
らう



「新板」
五種各
宝徳寺
賣いづ

春陽堂發行

春陽堂發行

どうらうく 桐葉屋
か何れも今
通ふも今
女生徒が純
優を愛ふも
さして愛を
するは
大木屋の鼻
大木屋の鼻
花翁の合
音曲も神樂
信馬樂と未
てはあつた
を眠くせん
うしは幸松
出来まはは歴
演劇を以て
も欠びの出
る幸きいな
か
屋根の破れ雨
洒といふ名
俗風派をふ
たふもの様
夏ハ天物と
さうらう



いよく
眠い
さうらう

いよく
眠い
さうらう



いよく
眠い
さうらう

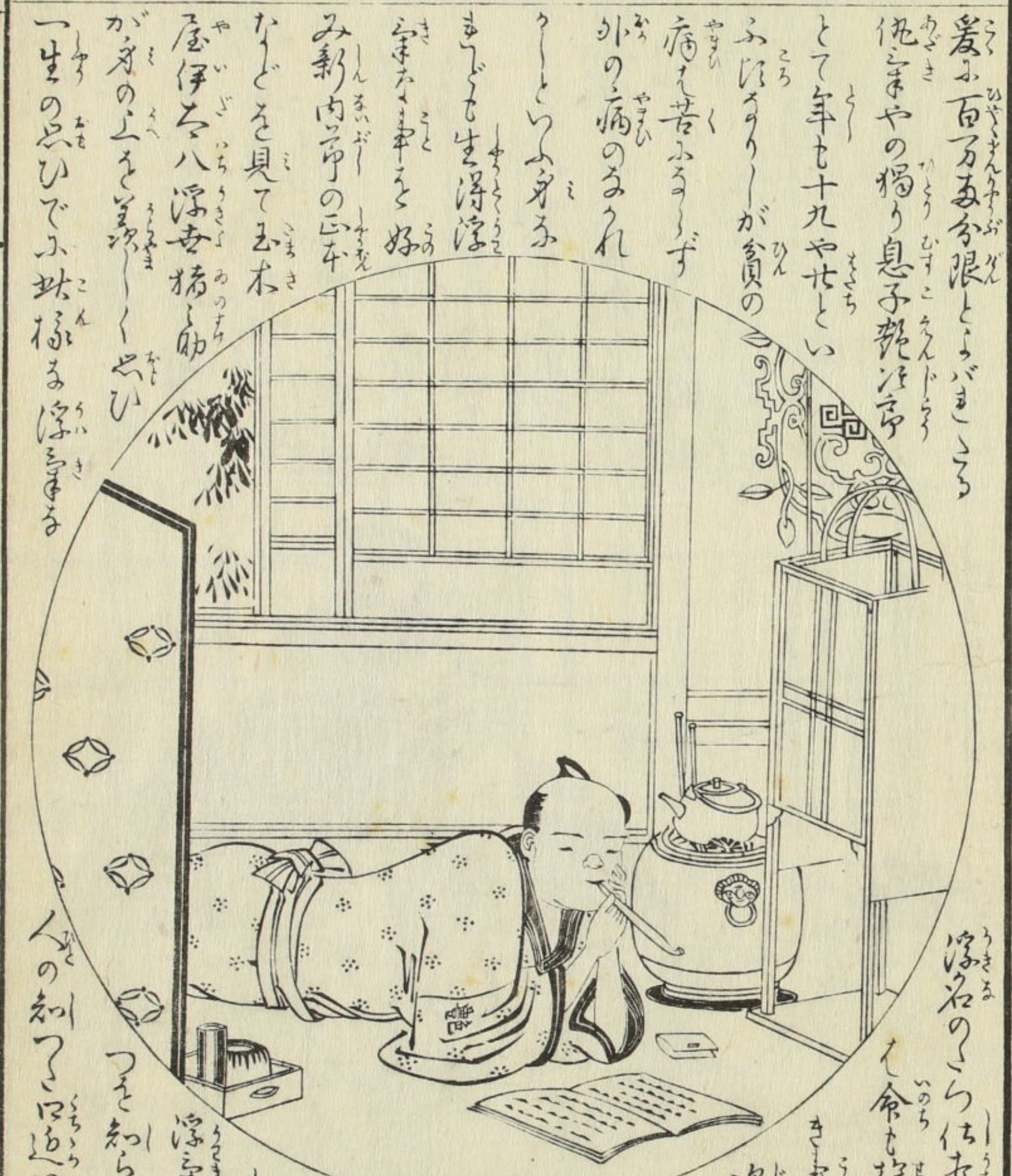
いよく
眠い
さうらう



懸子波してぬあさき
 を母に帯いぢりふ
 相起しつねの
 んでさうらひ
 うたれと
 子日く
 ナンギヤ
 傷子の手
 見遠ふふ
 洋んで白と
 空賢
 親父とくふは高まつく
 の藝者やうき若い者
 月夜とくは舞
 床の向陽の影
 古く是屋の見世の物

江戸生艶氣樺燒

天明五年己未年
 山東京傳作画



爰ふ百万五分限とよまこころ
 仇まやの獨り息子艶注
 とて年七十九やせとい
 ふほさうりが貧の
 病も苦ふるうさず
 外の病のまこれ
 うといふ身ふ
 まじも生得浮
 守たて申そ好
 み新内市の子本
 などを見ても木
 屋伊ち八浮者橋
 か身の上をさうらひ
 一生の思ひでふ地
 浮名のはらばわく
 命も控やうと馬鹿らし
 き申ふ掛たりは艶
 次市の区ふお利
 屋さく物とい
 不致高息子
 と橋田井思
 庵といふを鼓
 医者ありわく
 吹ふまき先わ
 りやとつやつて
 浮名ふさるやつさ
 つも知らねば成せん凡
 人の知つてははらばわく

通海界

春陽堂發行

氷よりハリ直ふおきやを
 江戸の二の若うを車の手
 南を文け先備刺が流すの如
 りさうし心得ぬの流石の後ま
 で二十松岩もさうさうのもの
 て痛いのを流し言が命ごと
 んで居うし中におく消しのも
 てさういとお入ををへてしま
 半二痛事ア、色男おんせとん
 らいものサ扱又流石の流石の
 るもの流石をさうさうさうさ
 け獲おえんしつと酒子を五
 寝ひけ込せら流しおらあ
 りおせぬれはけ込せら流し



代目園十郎
 二代目門助
 三代目門助
 四代目門助
 五代目門助

「おれさうさうさうさうさう
 つと女おんせとん流し
 ちの流しおんせとん
 せりおんせとん
 言せの
 ち」

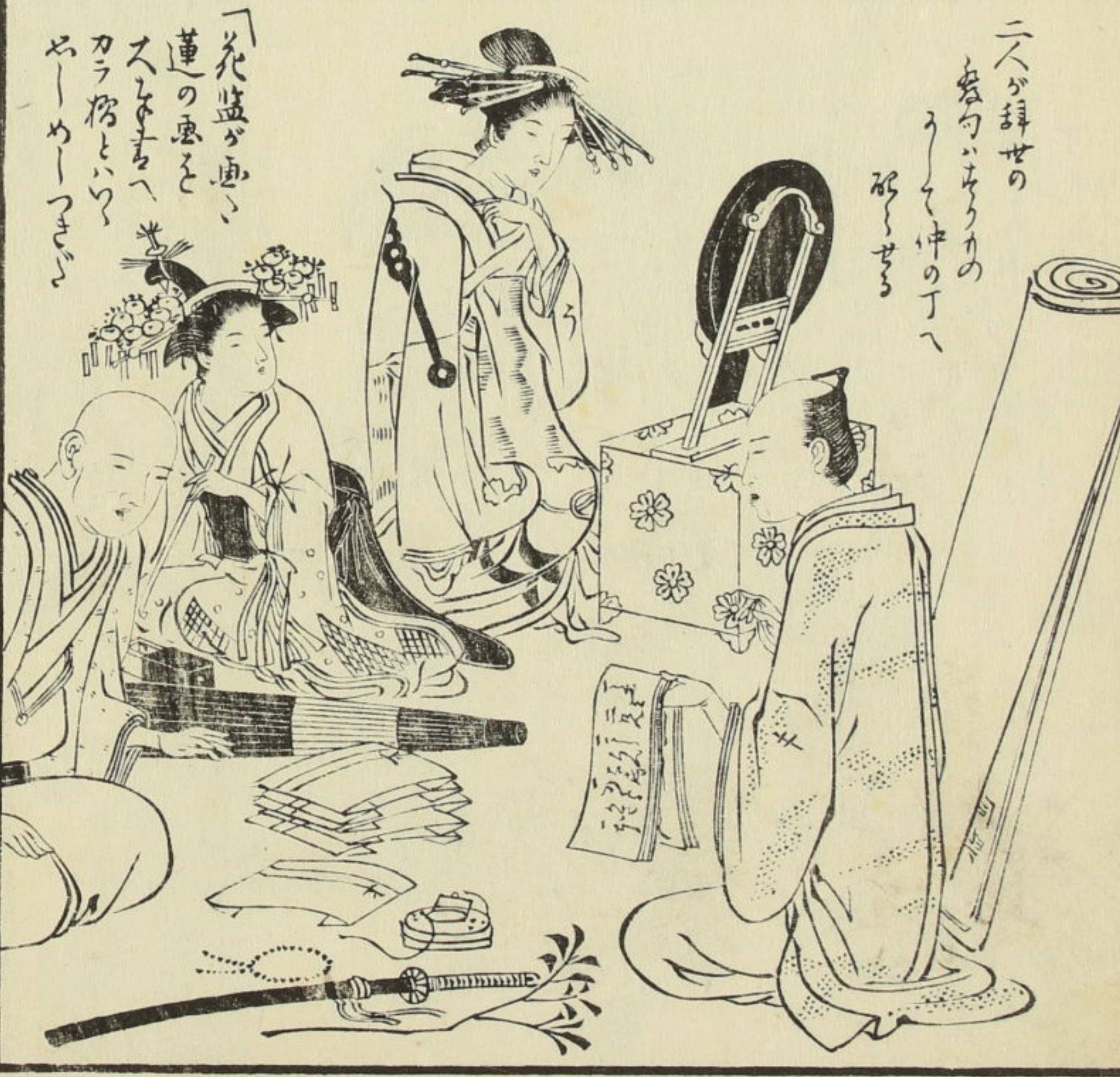
「おれさうさうさうさうさう
 つと女おんせとん流し
 ちの流しおんせとん
 せりおんせとん
 言せの
 ち」



公中其具を
移へしおそ
トト後日
のやうごと
るや佐治の
言まらうら
らう

花盛といふ
意味は明和
頃よりなほ
れらるる所
花盛富の
つらんとい
とつて況も
まて候とい
痛花盛

だらうといひの外海でいひ
ねむい長公候がては漢愛をホ
浪と候お波をせ一人一あつて産
ひけ中をを代で妻せむが一向
人のまのく人まふ事と保と女
笑きて浮名を三んといひ吉宗
へはも浮名やの浮名とつて女中
お方お福わう同女中といひ
あてふん子おゆるる尾の名
前を浮名をゆかす自か新送
笑きて連ひおし金をきつて以
不自せるお日本ごとと嫁ぐけり
能次介の女中笑をて改つても
やまらうとて考もるけよ一向ふ



二人が辞世の
お向の仲の丁へ
解せむ

「花盛が由、
蓮の虫を
スともまへ
カラ候といひ
やめーつま

昔其國の舞臺
トリ糸一氏
の白く
肩の袋テコ
籠す破テ
ワイ
質をかてし
候この身経
ヤ一おくを
ヤア一その
ちの煙巾で
云
母を女壽
といはるる

いふかどうかやまらういふやけや
容貌おまはるるのほい二百
あかき、妻を抱え内海まら
き廻らんをいふるる樂と
して居たりける感情別れを見て
兎角色男といふもの打擲まら
はくは頻あふれたる地廻
のいこを一人おとあつて四五人
おの仲の所の人通り多ひみ
がく候候て景隆の二階あつて
兵衛を唐ひおてりてを唄ハ
せれまら髪を名を梳せり候
月々月代へて青黛を塗る候屋
舟の沼かーうとサツト水松小佐



い誓をねと夏バラくし輝く如
 うあて腐るるがツイ御おが
 く清息小威て誓願とらてはう
 三つがけし降きてやしく小言の付
 ぐは時全馬馬娘といふは名
 かや半り三たう龍波而世間の
 を守ふ全満は志不消たてとときき
 全満が嫌ふう何れも言とやしく
 うけうとハ 親ふをいふは一人身おのり
 九夜でハ有 やせんし或
 大進位言き

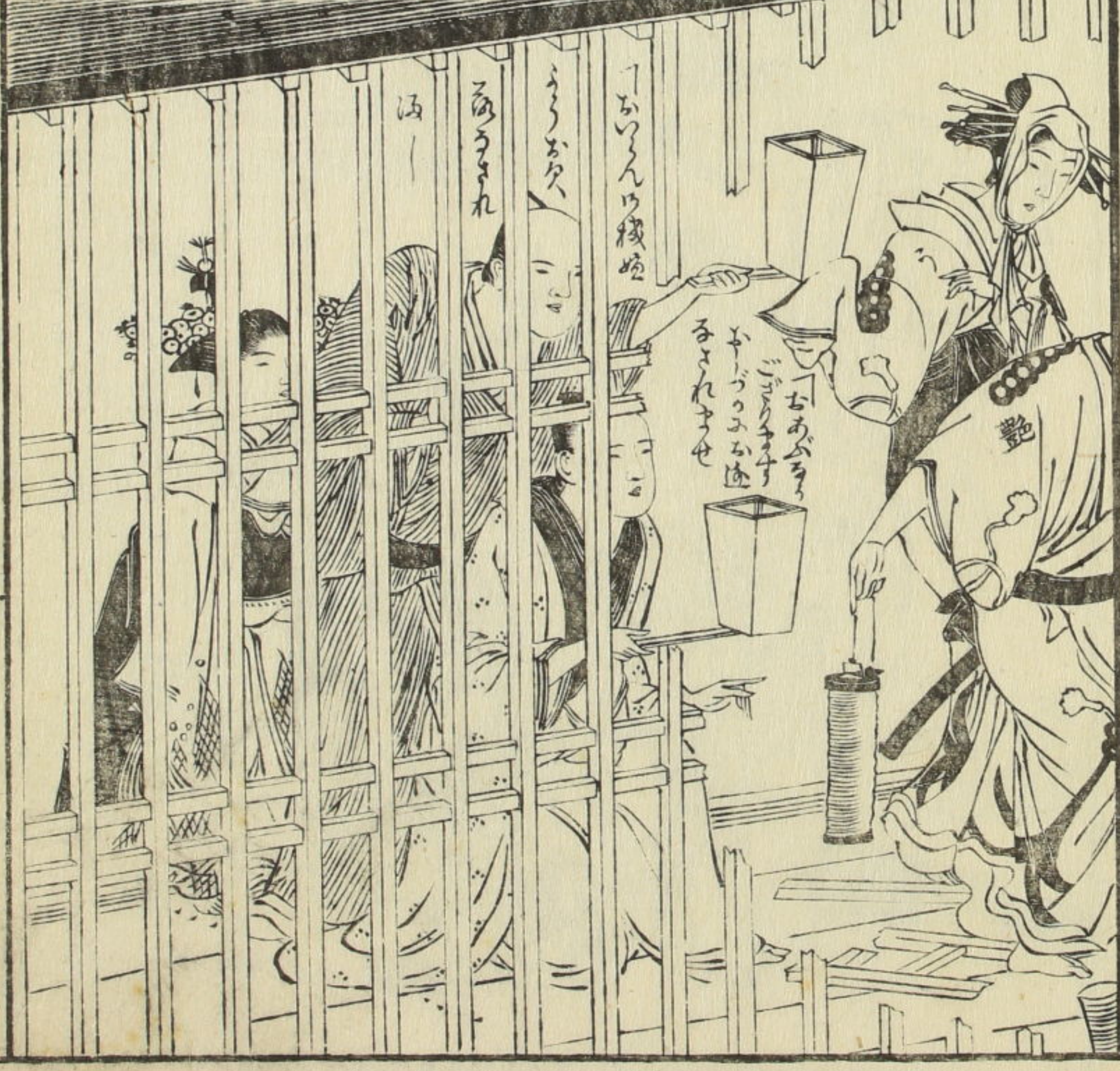
身送り中点何不足ハうけまど何
 らんるる南ををて身や
 種々たへたが色男のとも高貴地
 紙をいばらうとて夏も夏ぬふ
 地紙をいばらうとて夏も夏ぬふ
 肉刺をとりしをふハあしこりく
 せむる又より又いりく深ま
 乗が来て彼をとりとらふ七十五
 日の回限が切まる親とらうハあ
 を解さんし毎日の催促を
 もいりく深まをを思ふわね
 親族中の五成よて廿日間の日返
 を取ひやうくふゆ流々も今
 度ハカト取らうは死をてて



「二階より目撃す
 初めてぢや

は既中が
 大考り考り
 の返り文
 年測又春の
 仁とてハ
 行せし同又
 代月能終牙
 碑文を利生
 四行せし
 新紙を必板
 評刺し
 京傳め
 八半り低
 くさし
 子しふ

身送り中点何不足ハうけまど何
 らんるる南ををて身や
 種々たへたが色男のとも高貴地
 紙をいばらうとて夏も夏ぬふ
 地紙をいばらうとて夏も夏ぬふ
 肉刺をとりしをふハあしこりく
 せむる又より又いりく深ま
 乗が来て彼をとりとらふ七十五
 日の回限が切まる親とらうハあ
 を解さんし毎日の催促を
 もいりく深まをを思ふわね
 親族中の五成よて廿日間の日返
 を取ひやうくふゆ流々も今
 度ハカト取らうは死をてて



此間ふこころなる馬鹿小成り
 子もあふふねいひいひま
 何んぞういひいひいひ
 馬鹿の傳
 及び其あへんねてはてん
 ちんちん念の入りて馬鹿
 う一寸たすあいらり
 馬鹿の傳
 馬鹿の傳



「馬鹿の傳」
 「これい息あつたれ
 まがは本の伝者か
 女つゝまの教
 をおぼふうい
 うかゝと息子
 むろくれて居
 る形身をおら
 めつらんち
 こんみ
 まのえ

此の馬鹿の傳
 刑の上は山風
 のうらさき
 今ハ成れを
 絶てん
 孫のまの袖法
 うふして今
 ならは昔ゆか
 其明せもの
 うらや洋さ
 ざれい一寸考
 さわい多んか
 孫のまの袖法
 人の傳法
 考へてもの
 八のうらさ
 とん



「何んぞういひいひいひ
 食らあうるあはらんい
 一丈が要やうい
 知るゝ忽ちつを念
 進せせ其樂を求ふ
 要る訳せんせもの
 ちも来るせとて運て何
 へりしとて内を
 お馬を根こら
 言京（系つけ
 とりい
 のめい
 子ハ肝を
 のうと思つて
 げけを
 ぼい
 「馬鹿の傳」
 「角つゝま
 かねい
 「はたね
 うい
 十六

馬鹿の傳
 春陽堂發行

一諸國產紙類

並紙切手

實用便益ヲ旨トスル今日御進物等ニハ至極適當ニシテ外品ニ優ルヲ數等ニ御座候

一紙幣封緘紙

該封紙ハ各銀行諸會社ノ御用ニ應シ候爲弊店ニ於テ別澆立品ニ付最モ精硬至便ノモノニ御座候

一帳面並改正罫引帳簿類

右改正帳簿ハ單複式記簿法ニ因リ調製シタルモノ又御商業向ニヨリ適宜ノ罫引類數百種有之候

東京市日本橋區坂本町壹番地

海運橋角



奈良屋正兵衛

明治廿四年十二月十五日印刷
全 年十二月十七日出版

大通世界三卷與附

著者 幸堂 得知

東京日本橋區通四丁目五番地

發行者 和田 篤太郎

全 京橋區采女町三十一番地

印刷者 酒井 留吉

東京日本橋區通四丁目五番地

發行所 春陽



字入小説黃表紙縮

宛郵税一割増二錢切手ノ限る

○文學世界目次

半紙木板摺彩色表紙頗美本一冊讀切
實價八錢郵稅二錢十册前金七十五錢

- 第一 紅葉命の安賣
- 第二 山田美猿面冠者
- 第三 二堂作かくし妻
- 第四 山入作かた九糸
- 第五 忍月作辻占賣
- 第六 正直作かくれんぼ
- 第七 江見作野試合
- 第八 松華庵作ひつじかひ

○聚芳十種目次

本誌は諸大家の傑作小説各一冊讀切
金十三錢郵稅四錢十册前金一圓廿錢

- 一 香雪散人著花の種
- 二 山田美新色懺悔
- 三 山田美やたらじま
- 四 南史著臥待月
- 五 抱一庵主人著闇中政治家
- 六 廣津柳系のみだれ
- 七 三味道人著戀の重荷
- 八 石橋子著七戀の重荷
- 九 忍月著黃金村
- 十 幸田著新葉末集

○新作十二番目次

半紙木板摺彩色表紙日晝入美本一冊
讀切各實價三十五錢宛

- 一番 櫻庭著勝
- 二番 山田美此ぬ志
- 三番 山田美教師三昧
- 四番 三味道人著桂
- 五番 南史著倉武士
- 六番 學海著十津川
- 七番 香雪散人著梅
- 八番 幸得堂著蓬萊の嘶
- 九番 義捐後の月かけ
- 十番 美術世界
- 十一番 井上角漢城之殘夢
- 十二番 浦波六著井筒女之助

二版 末廣著政治南洋の大波瀾全
三百廿四頁挿圖數葉入實價四十八錢郵稅六錢

二版 西村著維新豪傑談全
大木極美製也實價金三十錢郵稅無料

二版 坪内著春家漫筆
實價廿錢郵稅六錢

三版 浪増著三日月完
實價廿錢郵稅四錢

山田美著新太平記
實價二十錢郵稅四錢

正直著油地獄
實價二十錢郵稅四錢

山田美著新太平記
實價二十錢郵稅四錢

井上角著漢城之殘夢
實價廿八錢郵稅四錢

浦波六著井筒女之助
發行

